

The region agriculture leader of Wakayama Prefecture

和歌山県
農業士会連絡協議会

和歌山の 農業士

2014
11
November

地域農業をリードする熱き農業者達

第3号



はじめに

本誌は、和歌山県の地域農業を牽引するリーダーとして知事に認定された『農業士』が、互いの活動を共有するとともに、関係者の皆様や一般の方々へも広く情報発信していくため、作成しています。

農業士が長年の農業経験で培ったその経営観や、これからの農業にかける熱い想い、各地域で展開される農業改良普及活動や農業士会としての取り組みなどを紹介しています。

読者の皆様方には、地域農業の実情や農業経営の現状等について、理解を深める一助としていただければ幸いです。

C【目次】 CONTENTS

<巻頭言>

『集落崩壊を食い止めよう』

(和歌山県農業士会連絡協議会 副会長 小川 教雄) …………… 1

『時の目』

(和歌山県農業試験場暖地園芸センター 所長 吉本 均) …………… 2

<私の農業>

農業士達がこれまで培った自身の経営や活動を紹介

低コスト・省力化を目指して 機械化で規模拡大 ～水稲+裏作野菜～

(和歌山市 地域農業士 岩橋 洋司) …………… 3

今できることを やってみる ～安全な野菜づくりと生産コスト削減～

(岩出市 地域農業士 林 孝誠) …………… 5

これからの消費者に合ったあんぼ柿

(かつらぎ町 指導農業士 的場 延武) …………… 7

楽しくもうかる農業を！ ～温暖な気候を活かした周年出荷産地～

(湯浅町 指導農業士 前田 一守) …………… 9

水田農業経営から、地域の農地利用を考える ～ミニトマトの周年栽培を中心に～

(日高町 地域農業士 野田 秀樹) …………… 11

地域環境保全のため、地域を越えての活動を展開 ～水稲請負で耕作放棄地対策～

(田辺市 指導農業士 玉置 俊裕) …………… 13

<農業に懸ける想い>

青年農業士や新規就農者が農業への熱い思いや取り組みを紹介

同世代農家との交流を通じて ～地域を守る！伝統の布引大根～

(和歌山市 和海地方4Hクラブ連絡協議会 山本 晃嗣) …………… 15

異業種からの新規就農

(紀の川市 農業研修生 笹井 洋二) …………… 16

柿

(九度山町 青年農業士 海堀 善照) …………… 17

消費者とのつながりを大切に ～観光ブドウ園とカキの複合経営～

(有田川町 青年農業者 高垣 秀章) …………… 18

田舎で生き残るために

(印南町 青年農業士 矢戸田 誠) …………… 19

農業を続けていくために

(田辺市 青年農業士 谷本 恭一) …………… 20

<県農業大学校学生です。>

農業大学校1年生の自己紹介(第1回)…………… 21

秋場 佑太

油谷 壮太郎

上山 かな恵

大渡 俊平

奥野 美瑞歩

尾崎 翔太

片山 卓哉

木下 昂城

小安 未貢

谷端 航平

田端 利行

土橋 弘誠

<試験研究レポート>

ミニトマト葉かび病を発病しにくい施設内環境づくりと効果的な薬剤防除で防ぐ (農業試験場 環境部 副主査研究員 大谷 洋子)	25
カキ枝変わり新品種 ‘堀内早生’ の品種特性 (果樹試験場かき・もも研究所 主査研究員 熊本 昌平)	27
ウメすす斑病に対する各種薬剤の防除効果と効果的な防除体系の確立 (和歌山県果樹試験場うめ研究所 研究員 武田 知明)	28

<普及活動レポート>

臭化メチル剤全廃後のしょうが根茎腐敗病防除対策への取り組み (海草振興局農業振興課)	29
モモ産地の活性化～高糖度化、安定生産技術の普及～(平成 25 年度) (那賀振興局農業振興課)	31
桃狩り観光 11 年目を迎えて (伊都振興局農業振興課)	33
「おひさまとまと」のブランド化の推進 (有田振興局農業振興課)	35
キヌサヤエンドウ新品種 ‘紀州さや美人’ の普及に向けた現地適応性の検討 (日高振興局農業振興課)	37
龍神地域における新規特産品づくり (西牟婁振興局農業振興課)	39
「なんたん蜜姫」のこれから (東牟婁振興局農業振興課)	41

<地域の逸品>

農業士が自慢の地域の隠れた逸品を紹介 !!

マコモタケ (海南市 地域農業士 池畑 恵子)	43
九度山町柿娘(かきっこ)グループの柿加工品 (九度山町 指導農業士 森脇 佐太代)	44
ゴーヤをつかったアイデアレシピ ゴーヤの佃煮 (日高川町 地域農業士 瀬戸 佐知子)	45
負けないぞ “熊野川” 「熊野川の味噌」復活 (新宮市 指導農業士 道阪 耕一)	46

<県農業士会活動レポート>

平成 26 年度和歌山県農業士会連絡協議会県外研修 ～木質バイオマスの地域内循環、担い手育成に取り組む大規模多角経営を視察～ (県農業士会連絡協議会事務局)	47
--	----

<農業関係制度の紹介・お知らせ>

「農地中間管理事業」による農地の貸借を始めました ～あなたの「貸したい」「借りたい」をサポートします～ (公益財団法人和歌山県農業公社(農地中間管理機構))	49
11 月と 12 月は、農作業事故に注意!! (県・JA グループ和歌山・NOSAI 和歌山)	51

「集落崩壊を食い止めよう」

和歌山県農業士会連絡協議会

副会長 **小川 教雄**



はじめに、農業士会会員の皆様をはじめ、本会運営にご支援をいただいています経営支援課並びに関係者の皆様には厚く御礼を申し上げます。

さて、現在 日本農業を支える農業者は、60歳以上が78%と高齢化が進んでいる上に40歳代以下が10%とアンバランスな状況となっています。しかも毎年、2万人以上の人々が離農しているそうです。

また、農村では人口減少が進み、2050年には中山間地域を中心に人口9人以下の「無人化危険集落」が全国で15,000集落に達すると言われていています。果たして10年後には、この国の食糧を支える若手農業者は、どれだけ存在しているのだろうかと考えさせられます。

私は、家族経営型の自営農家を基盤とした日本型農村は、もはや成り立たなくなっていると感じています。

一方、大都市住民の32%が農山漁村に移住を望み、特に20歳から29歳の若者の35%が農村への定住願望があると言われています。

しかしながら、農村への移住があまり進まないのは、生活を維持するための仕事がないというのが理由の一つで、これから移住を促すうえで、農村部に仕事を生み出すことこそ重要だと思えます。

我々農業者の立場で考えると、進み続ける高齢化と減り続ける担い手、そして増え続ける遊休農地を残された担い手だけでは、もはや維持できなくなっています。

家族経営型から規模拡大を図り、雇成型（企業型）農業を進めることにより、売り上げが増加し、先進的な機械設備などの導入も図れます。

私は、農業従事者一人あたり500万円を売り上げることを見据えて農業経営の目標として、日々頑張っています。

地域農業を守るには、まず我々農業士が経済的な体力を付け、先頭に立って農村への移住を希望する都市の若者を受け入れ、地域農業・農村の担い手として育てていかなければならないと考えています。

農業経験のない人を雇用し研修する場合は、雇用した農家に助成金が支給される制度もあるので、最寄りの振興局農業振興課に相談されることをおすすめします。最後に、会員の皆様をはじめ関係者の皆様にはますますのご健勝を祈念申し上げます。

「時の目」

農業試験場暖地園芸センター

所 長 吉 本 均



冒頭から引用で恐縮ですが、「虫の目」と「鳥の目」と「魚の目」を持ち、「判断は広く見渡した鳥の目」で、「決断は世間の流れを読んだ魚の目」で、という企業経営者向けの言葉があります。農業では観察力の鋭い「虫の目」を持った熱心な農家の人達が新しい技術や品種を開発し、「鳥の目」を持った技術者が地域で取り組める技術に改良し、「魚の目」を持った指導者が行政や流通に働きかけて産地を発展させてきました。我が国は国民の大半が農家の時代が長く、奉仕精神に支えられた分業で地域を豊かにするシステムができました。

農業試験場は明治の終わりにつくられ、まず海外や先進農家から情報を集め、品種改良や伝承技術の科学的な証明と技術化など、「虫や鳥の目」の仕事から始まりました。戦後は農薬や化学肥料、農機具や施設園芸資材などが次々と開発され、生地の要望と技術者や関係企業の努力で改良されてきました。その結果、農作業は楽になり、農産物の収量は劇的に増加し、野菜や花は周年栽培も可能になりました。そして、地域の特産品が高品質で安定して生産できるように試験研究機関も取り組んできました。

暖地園芸センターでは、本県中部の特産作物であるスターチス、カスミソウ、エンドウ、ミニトマトなどについて、新品種や新技術を開発して産地を支援しています。特に、スターチス増収のためのLED照明の利用技術の開発、経営費を安くするためのオリジナル品種の育成や省エネ技術の開発、省力で作業を楽にする草丈の短

いエンドウの育種など、従来と違った目線や手法で試験研究をおこない産地の問題解決に取り組んでいます。

長年の農産物価格の低迷やたくさんの産地の問題を乗り越え、この機関誌を手にする農業士の皆さんは、冒頭の3つの目を駆使した農業経営に取り組まれています。加えて、地域農業のリーダーや地域を守る仕事にも尽力して頂いています。そして、年配の方は冷蔵庫、洗濯機、白黒テレビが家族の一員になった日と同様に発動機から始まった機械化による農業の変革、農薬や肥料の恩恵、農家生活や地域の変貌を見てこられました。

現在は「効率」が追求され、価値は収益や対価の量で判断されます。しかし、農業は自らも老い、年輪を重ねながら技術を蓄積し、自然の変化の中で生命の能力を最大限に引き出す仕事です。そして、大半の国民が見失った「越えられない自然や時の流れへの達観」、すなわち「時の目」が専業農家のまなざしに残されています。すぐに変わる経済情報、グルメや健康関連情報などが氾濫する現在、「時の目」は過去を美化する事も、未来を危惧する事も否定します。そして未来は、不都合が予想された時点からすでに別の道を歩み始め、現在の想像を越えた許容できる所に着陸するのが常です。試験研究機関も「虫・鳥・魚の目」と「時の目」を開き、役割を果たしたいと考えています。

私の農業

低コスト・省力化を目指して 機械化で規模拡大 ～水稲＋裏作野菜～

和歌山市 地域農業士

岩橋 洋司



1. はじめに

事務用品関係の会社に10年間勤務後、就農しました。当時は水稲1.4haとその裏作野菜を2ha（キャベツ、ハクサイ、レタス、ブロッコリー）の経営で、私の住む地域の専業農家としては平均的な経営を行っていました。

就農後10年経過したころから経営を両親から本格的に受け継いだのですが、ブロッコリーが輸入品の増加により価格が暴落し大きな打撃を受けました。そこで、経営改善のためブロッコリーをやめ、裏作野菜はキャベツ、ハクサイ、レタスとし、水稲と合わせて5.2ha(就農時の1.5倍)に規模拡大しました。

平成18年さらに規模拡大することを目標に「認定農業者」の認定を受けました。その年、長男が大学を卒業し就農したことや、周辺農家では規模縮小、離農する人が増えていることから農業委員会からのすすめもあり、農地を借り受けて現在は水稲2.7ha、裏作野菜3.5ha、合計6.2ha(就農時の1.8倍)の経営を行っています。

2. 農業経営の特徴

I 水稲の省力化・コスト削減

○疎植栽培

田植えは株間を広くすることによりコスト削減を図っています。従来は坪あたり70株(条間30cm×株間16cm)でしたが現在は37株(条間30cm×株間30cm)で植えることにより育苗経費や作業時間が削減できます。

【農業経営の概況】

○作付品目と面積

水稲	2.7ha
キャベツ	2.0ha
ハクサイ	1.2ha
レタス	0.3ha

○労働力

家族 4人

収量はほとんど変わらず540～600kg／10a ほどです。

○側条施肥

側条施肥田植え機の導入により施肥量を2割削減し、さらに施肥作業を省くことができました。



稲刈り風景

II 野菜の省力化・コスト削減

○GPS車速連動施肥機

GPS受信機でトラクターの走行速度を読み取って、車速に連動して施肥量が調整されるので肥料の散布おらがなくなります。特にアブラナ科野菜の根こぶ病対策に施用する石灰窒素の散布に重宝しています。

○畝内施肥

畝立て、施肥、農薬散布作業を一工程で行うので従来に比べ作業が大幅に省略できるし、畝内に肥料を散布するので全面施用に比べ施肥量を2割ほど削減できます。



GPS車速連動施肥機

3. 今後の経営方針

今後も水稻+裏作野菜を基本に機械化による省力化と高品質化に取り組みたいと考えています。

特にレタスは1~2月出荷はトンネルによる保温が必要で、これを省力化、高品質化すため簡易なハウス栽培を導入したいと考えています。

また、包装機の導入による出荷調整の省力化と荷姿の向上です。包装機は1時間当たり700玉以上(人手の5倍以上)処理できるものを導入したいと考えています。

4. おわりに

上述のように私は農業経営改善において機械化による省力化、コストダウンを図っているところですが、今後とも農家、県、市、JA、農業委員会等関係機関一体となり地域農業振興を進めることにより地域の発展と若い担い手が育つと考えています。

ところで、前ページのコンバインを運転している青年は就農8年目の我が家の後継者です。趣味はマラソンで彼のフルマラソン最高記録は2時間21分で、今年の12月7日の福岡国際マラソンに出場するそうです。完走と好タイムを期待しているところです。



畝内施肥



白菜の定植

私の農業

今できることを やってみる ～安全な野菜づくりと生産コスト削減～

岩出市 地域農業士

林 孝 誠



1. はじめに

私は、大学の農学部を卒業後23歳で就農しました。

当時、両親は花き栽培中心でストック、カーネーションのハウス栽培をしていましたが、花きの価格が下落したため、ミニトマト栽培をはじめたところでした。

出荷先が生協と取引のある紀ノ川農協であったため農薬、肥料の使用を少なくしたトマト栽培（半促成・抑制）に転換、父の引退後はトマト（半促成）と冬春作のチンゲンサイ、水稻（減農薬・無農薬）などの栽培をしていました。

父の死後、労働力不足や6月の高温によるトマトの日焼け果の激発等により、トマトの作付けをやめ、現在では水稻を中心に、チンゲンサイ、レタスの栽培をしています。

2. 農業経営の特徴

○チンゲンサイ、レタスの減農薬栽培

チンゲンサイやレタスの雨除け栽培（既存施設利用）では天敵のアブラバチやクモ等への影響の少ない農薬を使っており、有機リン系農薬やIGR（脱皮阻害）剤の使用は控えています。

また、ハウス内は乾燥しやすく、栽培当初はアブラムシ類の発生がみられていましたが、今では土着天敵によりその発生は抑制さ

【農業経営の概況】

○作付品目と面積

チンゲンサイ	32 a
レタス	10 a
水稻	120 a

○労働力

家族	2人
臨時雇用	1～2人

れ、経済栽培が可能なまでに減少していています。

○水稻の無農薬栽培

無農薬栽培は水もちの良い水田44aで、ジャンボタニシの除草効果を利用して取り組んでいます。ジャンボタニシは稲の稚苗も食害するので、田植え直後から2週間程度は稲に被害が出ないように水田の水位を下げた浅水管理し、このタニシに藻類を食べさせます。稲の食害をなくすには、代かき時に水田を均一にしながらおくことと、初期密度を下げるのが重要です。水稻が成長し、中苗になると稲の食害が減るので、今度は水位を上げて雑草を食べさせます。発育の進んだジャンボタニシは産卵前に捕獲します。

なお、ジャンボタニシは、水田の水がなくなると他に移動し、逆に水位が深いと稲を食害するので注意が必要です。また、畦畔の草刈りによるウンカ類等の害虫の生息環境をなくすなど、耕種的防除と併せて、これらジャンボタニシの密度調節をしながら、水田雑草の無農薬栽培にうまく活用しています。

3. 今後の経営方針

TPP協議などの動向により、水稻栽培は米価の下落が予想されており、今後は生産コストの削減や面積拡大が必要になると考えています。このため、私は水稻の耕起式の乾田直播栽培を検討しています。

課題として、①播種時期が4月中旬で通常に移植栽培に比べて1ヶ月程前進するため、チンゲンサイやレタスの収穫時期（4～5月）と重なること。②深水管理ができる水もちの良い水田であることが必要等が考えられますが、私は省力で低コストに繋がる水稻の乾田直播栽培に可能性を感じています。

4. おわりに

最近、夏の高温、長雨、集中豪雨など温暖化に伴う気候変動や、施設栽培でのオンシツコナジラミ、水田でのジャンボタニシなど外来生物に悩まされていますが、「今できることをやる」「できることから始める」をモットーに安全な野菜づくりに励んでいます。



水稻の無農薬栽培



減農薬栽培のレタス



チンゲンサイ苗

私の農業

これからの消費者に合った あんぼ柿

かつらぎ町 指導農業士
的場 延武



1. はじめに

私は、高校卒業と同時に専業農家の十四代目として就農しました。

当初の経営概況は、梨・富有柿栽培、そして500年の歴史がある四郷地区特産の串柿生産で年収の大半を担っていました。

私が就農後は労力のかかる梨栽培からたねなし柿に転換し、短期間で大きな現金収入が見込める串柿生産に力を入れることにしました。その始めとして、柿皮剥き機械の導入・効率的な作業場・干し場の建設を進め、数人の短期パートを雇用し規模拡大に努めました。

2. 経営の特徴

昭和60年代に入り、文化の多様化に伴い、正月用串柿の需要も減少しはじめました。

考えた末、串柿生産ができる気候・施設・技術を活かせるたねなし柿の規格外品を使用し一年中食べられる干し柿生産を始めました。しかし、干し柿生産はたねなし柿の特徴である軟らかい果肉がわざわざいして歩留まり率が悪く、加工は困難を極め、火力乾燥によるあんぼ柿生産に切り替えました。

当時、たねなし柿は有利販売されていましたが、規格外のたねなし柿の処分に困っていました。あんぼ柿生産は、規格外品の有効利用であると同時に、市場出荷への過剰供給を防ぐための方策にもなり、価格の安定に貢献していると思われま

【農業経営の概況】

○作付品目と面積

たねなし柿 100a

○あんぼ柿の年間製品

400t

○労働力

家族 3人、常雇用 30人

臨時雇用 130人

平成になりあんぼ柿の生産拡大のため冷凍設備を検討していたところ、かつらぎ町役場より柿乙女施設の利用委託を持ち掛けられ、四郷の自宅にあったあんぼ柿の加工機械をすべて移転し、現在地に移ることにしました。その後当方も法人化し、他の生産者と共に平成22年に「合同会社かつらぎ町あんぼ柿加工組合」を立ち上げ現在に至っています。

生産量の80%以上を、JA紀北かわかみに委託販売しています。販売開始当初はあんぼ柿の産地としての知名度もなく「あんぼ柿」という名前すら知られていない状況でした。その中で和歌山県、かつらぎ町、JA紀北かわかみの全面的なバックアップのおかげで全国的な知名度をもつまでになってきています。

3. 今後の経営方針

和歌山県のあんぼ柿としての地位を全国的に不動のものとしていくためにも、新規生産者を増やし、生産拡大をすることが大切です。また、安全安心なあんぼ柿生産のための設備投資をおこない、消費者の支持を得られるよう努力していくことも大切だと思います。それが地元の魅力ある就業場所としての役割を果たす事にもなると考えます。

4. おわりに

これからは、農業を取り巻く環境も大きく変わりグローバルな戦いが始まります。

今後、自社の体力の強化（販売面及び生産面）を図るとともに、後継者である若者たちにバトンタッチし地域社会に貢献できる組織づくりに取り組んでいきたいと考えています。

あんぼ柿の商品



ひとくちたねなし柿・プチ柿



あんぼ柿

私の農業

楽しくもうかる農業を！

～温暖な気候を活かした周年出荷産地～

湯浅町 指導農業士

前田 一守



1. はじめに

私は、県立吉備高校（現有田中央高校）を卒業後、昭和47年に就農しました。

就農当初、私の住む栖原地域のカンキツといえば、ほぼすべて三宝柑で、温州みかんはごく僅かでした。やがて、三宝柑にかげりが見えてきた頃、宮内伊予柑を高接ぎし、伊予柑の産地へと変わっていきました。

その後、セミノールやカラ、不知火などが導入されてきました。現在、地域のカンキツ全体のうち温州みかんは4割程度で、昔から中晩柑が主体の産地です。

2. 農業経営の特徴

私は、元々温州みかん栽培の方が好きです。中晩柑は袋かけがあり、手間がかかるため雇用が必要となります。私の経営は地域と逆で、温州みかんが6割を占めています。

○生産面での取り組み

我が家の収穫は、温州みかんの極早生から始まります。極早生の品種は上野、日南早生で、部分マルチを実施しています。早生は宮川主体で11月上旬から12月いっぱい続き、中生系に移行します。

年が明けたら中晩柑が始まり、2月から5月まで、はるみ、清見、カラ、セミノールと出荷が続きます。

栖原地域の山畑は、ほとんどに共同防除施設

【農業経営の概況】

○作付品目と面積

温州みかん	160a
（極早生10a 早生80a 中晩生70a）	
清見	50a
セミノール	40a
カラ	30a
はるみ	15a

○労働力

家族	3人
臨時雇用	2人

が設置されていて、3つの共同防除組合からなっています。元々は灌水施設からスタートし、その後それを使って多目的利用で共同防除組合を立ち上げました。栖原地域の共同防除の取り組みは、全国に先駆けたものです。



共同防除施設の稼働の様子



共撰施設の外観

近年は春から夏にかけて干ばつ傾向であり、この施設が役立っており、本年も7月28日から稼働しています。

また、品目別ではカラが有望と考えています。生産面では寒さやかいよう病に弱く、場所も選ぶのでどこへでも植えられる訳ではなく、作りにくい品目ですが、販売面では高単価で取引されています。当地域の温暖な気候を利用した、有望な中晩柑だと思えます。

○販売・流通面での取り組み

出荷は地元の「マルス栖原三宝柑出荷組合」での全量共撰で、おとし80周年を迎えた歴史ある組合です。私は現在、当組合の組合長を務めて2期目であり、組合員数は約60名となっています。

出荷先は、中晩柑が関東中心、温州みかんが関西中心で、北陸を含めた全国となっています。

買い手である市場からは、10月の温州みかんから4、5月の中晩柑までのリレー販売が魅力の産地と評価されており、組合員としても長く販売でき、収穫労力も分散できています。

とにかく、売りである中晩柑は、果実個々に袋かけをすることで、品質の良い物を生産、販売するよう心がけています。

3. 今後の経営方針

組合長に就任した平成24年から、息子が就農し一緒に農業をしています。

今後はモノラック、園内道、スプリンクラー施設など、生産しやすい環境づくりに取り組みたいです。

組合としては、カラを増反し、収入を上げられたらと考えています。作業面では人手も少なくなってきたので、選果機等の導入に加え、あまり荷物を人力で運ばなくても済むような、ちょっとした作業改善を取り入れていきたいです。

4. おわりに

息子が就農してくれましたが、今後の農業には心配もあります。農家減少をどうにかしたいし、もっと若い人に農業をやって欲しいです。

若い人は今が農業を始めるチャンスです。今は補助事業が色々あり、規模を大きくすることも可能です。好きな時に休めるし、必要なのは自分の頭だけです。確かに農業をしていると「今年は安かった」という時があったり、それなりの投資も必要ですが、必ずやった分だけ返ってきます。

私は農業はいいと思っています。サラリーマンとは違う、やりがいのある農業を地域の若い人に感じて、取り組んでもらいたいです。



有望な中晩柑「カラ」

私の農業

水田農業経営から、 地域の農地利用を考える ～ ミニトマトの周年栽培を中心に ～

日高町 地域農業士

野田 秀樹



1. はじめに

私は、県農業大学校を卒業後、地元のJA勤務を経て、母の他界を機に平成元年に就農しました。

私が就農するまでの我が家の農業経営は、葉タバコを中心に、露地野菜や甘夏を栽培していましたが、就農前年に父がミニトマトの施設栽培を導入したところでした。

就農するに当たり、父と経営部門を分けるため、スイートピーの施設栽培（6a）に取り組みました。

その後、平成10年の台風によるハウス倒壊を機に花き栽培をやめ、ミニトマトの施設栽培を拡大して現在に至っています。

2. 農業経営の方針と現況

現在、ミニトマトの施設栽培を中心に、露地野菜、水稻との組み合わせによる農業経営を実施しています。

また、JA紀州農作業受託会の一員として、田植え、稲刈り等の作業受託を行っています。

○生産面での取り組み

ミニトマトは施設と露地の組み合わせにより周年出荷を行っていますが、近年の重油高騰に対処し施設栽培の10月から翌年6月末までの収穫出荷作型の一部を、11月定植の年内無加温による3月からの収穫出荷作型に転換して

【農業経営の概況】

○作付品目と面積

ミニトマト（施設）	17a
ミニトマト（露地）	5a
ウスイえんどう（露地）	10a
ゴーヤ（露地）	10a
水稻 180a・水稻作業受託	60a

○労働力家族 3人

臨時雇用 のべ10人

います。

また、ハウスに循環扇やエコフィンの導入を行い、重油使用量の節減に取り組んでいます。

○販売・経営面での取り組み

主力のミニトマトをはじめ農産物の大部分を農協出荷しており、農協生産部会での情報収集等を通じ、ミニトマト品種の「サンチュリーピーピュア」への統一や、土壌水分等肥培管理の工夫により、高品質生産に努めています。

3. 今後の経営方針

我が家の農業経営は、昨年息子が就農したことにより、本年から水稻部門を父に替わっ

で私が中心となり行うこととしています。

ミニトマトの周年栽培を経営の柱とするなかでも、息子には、農業経験を積みながら新しい視点をもって経営の改善に取り組んで欲しいと考えています。

4. おわりに

農業従事者の高齢化と耕作放棄地の増加、中山間地等での獣害対策は、全国的な課題となっていますが、当地域においても例外ではありません。

このため、数年前からJA紀州農作業受託会（農援隊 会員11名）に参加し、委託者から

JAに申込みのあった水稻の作業受託を行っています。

また、昨年度から活動を開始した「日高町水田農業活性化農業経営運営協議会」では、町・JAと連携のもと耕作放棄地の再生利用活動に取り組んでおり、これまでに町内で約3.8haの耕作放棄を解消しています。

優良農地の維持保全は、次代を担う農業後継者の育成と地域農業の発展を図るうえで、重要な課題であり、今後とも、町・JA等との連携のうえで地域の活動に参加していきたいと考えています。



ミニトマトの栽培風景



ゴーヤの栽培風景

私の農業

地域環境保全のため、地域を越えての活動を展開

～ 水稲請負で耕作放棄地対策 ～

田辺市 指導農業士

玉置 俊裕



1. はじめに

○取組の概要

私の農業経営は、ウメを中心とし、水稲の請負耕作とカンキツの複合経営をしています。

○これまでの経過

長男でもあり、昭和43年に就農し、当時は、ボイラー整備士としても働いていました。昭和46年には肥育牛を約50頭飼育していましたが、昭和50年頃から、ウメの栽培を拡大し始めました。平成6年から水稲の請負耕作を行い、平成17年にライスセンターを整備しました。平成17～18年に西牟婁地方農業士会連絡協議会会長、平成23年から農業委員を務めています。平成18年度に県農林水産業賞（農業部門）を受賞しました。

2. 農業経営の特徴

今までの農業経営を振り返ってみると、ライスセンターの設置が印象に残っています。地区内で作業に手が回らなくなった方を支援するため、水稲栽培の請負を始めました。その後、徐々に高齢化により作業委託が増加し、請け負っている地域は田辺市内を越え隣接するみなべ町内まで広がりました。現在は、約10ha（約30戸分）の育苗から刈り取り調整まで対応しています。誰かがやらなくてはいけないとの思いでがんばってきました。

生産の効率化のため、造成による農地の平坦化、園内道の整備、機械化により労働の軽減を

【農業経営の概況】

○作付品目と面積

ウメ	230a
水稲	1,000a (うち自園地30a)
中晩柑	40a

○労働力

家族	4人
臨時雇用	3人（ウメ）

図りました。

経営管理については、パソコンによる記帳を行い、経営状態の把握に務めています。

米は冷蔵庫で保管、注文に応じ随時販売しています。梅干しについては、3年単位くらいの契約販売を交渉中です。

エコ農業も意識した肥培管理を行っています。米を販売していても、消費者の意識は、結局は外観の品質で選ぶことが多いので、米の選別機を導入しました。

平成23年から農業委員として、青年就農者の手助けや、遊休農地対策や農地売買の斡旋に係わっています。

県農業大学校もくせい会の西牟婁の役員も務めさせてもらいました。



思い入れのあるライスセンター

3. 今後の経営方針

今後の経営については、今年、息子に経営移譲したので、現在息子に任せている状態ですが、息子への助言や指導に力を入れているところです。

ウメ以外の品目として中晩柑に力を入れたいので、既に栽培している露地の「せとか」にビニールハウスを設置し、高品質果実生産ができるようにしたいと考えています。

また、5年後は、私も70才になりますので、労働力の確保のため、常時雇用1人は必要と考えています。



経営はウメが主

4. おわりに

これからの担い手育成や地域農業振興については、土地条件を加味した多様な経営を考えて行くことが大切だと思います。例えば、田辺市大坊地区の田辺湾や白浜を一望できる立地条件を活かした観光農業や田辺市秋津川地区の夜温の低さを利用した夏野菜等々。

また、現在、ウメの価格が最盛期に比べ低迷しているなかで、他の主力農産物になかなかシフト出せない状況ですが、6次産業含め少量多品目でいくのか、ウメ・カンキツの量で押し切るのか、どちらかに絞って経営するほうが良いと考えています。中途半端は成り立たないのでは、と考えています。

現在、指導農業士として活動を行っていますが、今年度、年齢により解除となります。あっという間にこんな年になってしまいましたが、これからも10年位先を読みながら、地域の農業振興のためがんばりたいと思っています。



息子と

農業に懸ける想い

同世代農家との交流を通じて

～地域を守る！伝統の布引大根～

和歌山市 和海地方 4Hクラブ連絡協議会

山本 晃嗣



1. はじめに

私は、和歌山市南西部の布引地域で就農して3年目になります。先祖代々、そして両親も農業を営んできたことから自分も就農しようと思い立ち、平成23年に大学を卒業後、県農業試験場研修員として1年間勉強し、平成24年に就農し、同じ世代の農家との交流を図るため和海地方4Hクラブにも加入しました。私の地域は「布引ダイコン」で有名で、このダイコンは、他産地のものに比べ見た目のきめが細かく、伸びが良いと市場でも定評があります。まだまだ農家としては半人前ですが、両親や祖父母のもと、日々成長しながら頑張っています。

2. 農業への想い・取り組み

私が就農した砂地地域は専業農家が多く、非常に活気がある地域でしたが、ここ近年は農家数も減少し、若手の就農者も減ってきているのが現状です。そんな折り、対面販売活動等に取り組んでいる和歌山市のクラブ員や普及指導員から声が掛かり、4Hクラブに加入しました。同世代の仲間と情報共有し、今後の農業に活かしていこうと思います。クラブ員が、消費者や販売先のニーズに応じた作物や品種の導入を行っていたり、高品質栽培のための技術導入など自分たちで工夫して営農している姿に刺激を受け、今行っている経営にも何かヒントになるものはないか日々研究しています。クラブの活動では、海南市の「軽トラ市」での対面販売、県外への視察研修、地域女性との交流会等自分1人ではなかなか出来ない活動を通じて、消費者の

【農業経営の概況】

○作付品目と面積

冬ダイコン	300a
春ダイコン	50a
ニンジン	250a

○労働力

家族	3人
臨時雇用等	5人

生の声や他地域の現状、次世代への継承等の農業に対するモチベーションを高めることが出来ました。今後は、自分の代まで続いている農業を次世代にも受け継ぐべく、こうした若い仲間を作りながら地域の伝統野菜である「布引ダイコン」を守っていきたいと思っています。



4Hクラブでの県外視察

農業に懸ける思い

異業種からの新規就農

紀の川市 農業研修生
笹井 洋二



1. はじめに

私は大学院を卒業後、京都の半導体メーカーで10年勤務（回路設計および開発を担当）してきました。昨年の12月から青年就農給付金（準備型）を利用し、同じ紀の川市の指導農業士の小川教雄さんのところで研修中です。

なぜ農業を選んだかと言うと、自分が経営者、主体になって物事を進めていくことができるからです。また、現在、農業従事者数は減少し、農業者の高齢化により、休耕地が増えています。そのような休耕地を借りて、地域を活性化し、社会貢献したいという思いがあったため、農業を自分の生涯の仕事にしようと決意しました。

2. 農業への思い・取り組み

異業種からの就農のため、農作業に体がついていかなかったり、段取りが分からなかったりしましたが、最近はなんとなく次の段取りや、何をすべきなのかが分かってきました。しかし、素人の私には毎日が勉強です。技術的なことはもちろんのこと、農業に対する心構えや経営理念などを教わっています。なかでも、私が経営を開始するにあたって大切に思っていることは「人より多く、人より安く作る」ということです。常に効率的な方法は何かということ意識して作業に取り組んでいきます。

そして、エンジニアだった経験を活かして

【農業経営の計画】

○作付品目と面積

玉ネギ	80a
白菜	40a
葉ボタン	30a
じゃがいも	30a
ホオズキ	5a

○労働力

家族	4人
臨時雇用	2人

PLC(programmable logic controller)などを用いた灌水システムの自動化など、これまでにない新たな省力化システムを導入したいです。そしてその技術を地域に広めていきたいと思っています。

今後、私の経営の主要な作物になるものは玉ネギ、葉ボタン、白菜を予定しています。研修先で教わったこれらの作物をメインに進めていきます。農業一年生の私にとっては、さまざまな失敗があると思いますが、PDCAサイクルを行い、問題点を洗い出すことによって2年目、3年目と同じ失敗をしないように心掛けていきたいと思っています。そして、その失敗にくじけず色々チャレンジをしていきたいと思っています。

農業に懸ける思い

柿

九度山町 青年農業士

海堀 善照



1. はじめに

私は、県農業大学校を卒業後、2年間精密機械製造会社に就職したのち就農しました。

我が家では、柿栽培を中心とした経営をしています。

刀根早生・富有柿を主力に、夏果実としてスモモ、小梅を栽培しています。

平成15年に、柿の早期出荷を目的に極早生品種の中谷早生を導入しました。

2. 農業への思い・取り組み

経営の主な柿品種は、中谷早生、刀根早生、富有柿であり、近年、取り組んできたことは、高品質化・省力化作業効率向上を目的とした低樹高化・間伐等で、剪定については、九度山町の先輩農家の方に技術を教えていただき、作業効率を上げ、収益の向上を図っています。

また、スモモは収益の高い品種の導入、小梅は園地拡大を目標に取り組んでいきます。

今後も、先輩農家方やJA青年部の盟友、いろんな方々と話し合いながら、考え方や技術を身に付けて行きます。

【農業経営の概況】

○作付品目と面積

柿	340a
スモモ	30a
小梅	30a

○労働力

家族	3人
臨時雇用	3人



農業に懸ける想い

消費者とのつながりを大切に

～観光ブドウ園とカキの複合経営～

有田川町 青年農業者

高垣 秀章



1. はじめに

私は大学を卒業後、平成19年に就農しました。

我が家では、ブドウとカキを組み合わせた果樹複合経営を営んでいます。ブドウはほぼすべて観光で販売、カキはJAへ出荷しています。

我が家のブドウ園がある「有田巨峰村」は、昭和47年に造成され、昭和57年に巨峰の観光ブドウ園が開園されました。

基盤整備された農地ではスピードスプレーヤによる薬剤散布が可能で、定置配管による畑地かんがい施設等が整備され、省力化が図られています。

2. 農業への想い・取り組み

経営の主要品目はブドウで、朝どりした果実の当日出荷を心がけています。

観光ブドウ園を開いていることから、「種なしブドウはないのか」「もう少し少量で高級な商品を」といった声をいただくことがありました。これらの要望を取り入れ、それまで「巨峰」中心でしたが、「ピオーネ」と「シャインマスカット」を導入するとともに、新たな販売箱を作成しました。

これらの取り組みは、お客様から好評を得ています。

今後はHPを作成して、有田巨峰村をよりたくさんのお客様に知ってもらいたいです。また、本当の意味での環境にやさしく安全で安心、おいしい商品を販売できればと思っています。

観光農園を営んでいると、観光ならではの辛さもありますが、仲間と手を携えて頑張ってい

【農業経営の概況】

○作付品目と面積

ブドウ	100a
（うちハウス	30a)
カキ	80a

○労働力

家族	3人
臨時雇用	2～6人

きたいです。

最後になりましたが、ぜひ有田巨峰村の美味しいブドウを食べに来て下さい。



収穫期を迎えたブドウ園



こだわりの販売箱

農業に懸ける思い

田舎で生き残るために

印南町 青年農業士

矢戸田 誠



1. はじめに

私の家は農家でしたので、小さい頃から農業に親しみがありました。一人っ子なので、ゆくゆくは後を継ぐだろうとは思っていました。小さい頃から少しずつ作業を手伝い、いろんな事を学んでいくうちに厳しさ楽しさを知りました。

2. 農業への思い・取り組み

当初は、梅（自然農法）、花（千両など）、自家用の米などの栽培を手伝っていました。しかし、家から離れた山間の畑でしたので、年々イノシシ、シカなどの獣害が酷く、何も作れない状況になり、相当悩みました。

これではダメだと、まず家の近くの田畑（耕作放棄地）を借り、立て直しを考えました。しかし何年も放棄されていたのでススキの株だらけ、作土も浅く大変でした。「ああ、何年も作らないとこんなに土って痩せるんだ」と痛感。何年か経ってようやく「作れる土」に。ちょうどその頃、結婚する事ができ、良き理解者が増えました。

そこで、何を作ったらいいのか、これからの農業はどこを目指すべきかと家族と話し合った結果、「百姓の原点に戻ろう」ということになり、まず自分達が安心して食べられる物を作る事、その後「自然農法の野菜を必要としている人に届けよう」という事になりました。

まず、ホームページ作りからです。野菜や風景の写真を載せたり、検索にヒットするようキーワードを載せたり、まめに更新したり、知り合いに宅配通販の練習をさせて貰ったり、と手探り状態からでした。試行錯誤しながらではありますが、徐々にお客さんも増え、今は生産量

【農業経営の概況】

○作付品目と面積

花木類	70a
野菜類	50a
米	10a

○労働力

家族 4人

との調整（悪天候や獣害の影響）で待ってもらったりしています。

また、安心して野菜を買ってもらうために、育てている所を見に来てもらったら良いのではと、農家民泊を始めることに。かまどや五右衛門風呂をつくり、薪割りや風呂焚き体験などで田舎を味わえる宿「矢戸田自然塾」をオープン。「いなみかえるの宿」にもお世話になり、小中学生や海外の学生さんにも出会えました。

家族の理解がないと出来ない事ばかりですが、これからも協力して「楽しい田舎」を目指していきたいです。



自然農法の野菜

農業に懸ける思い

農業を続けていくために

田辺市 青年農業士

谷本 恭一



1. はじめに

私は、就農して今年で15年目を迎えました。みかんを柱に、梅も栽培しています。

私が就農した年から梅の栽培を始めたのですが、みかんの薬剤散布や摘果などの大事な作業と競合することが多く、みかんの品質低下や、隔年結果対策、改植事業の遅れという良くない面がでてきました。そこで、家族で話し合った結果、梅の栽培面積を拡大することは控え、みかんに力を入れようということになりました。

まず最初に取り組んだことは、作業効率を良くすることを目的に、老木や樹高の高い樹の改植を行いました。また、それまでは、宮川早生とポンカンの栽培だけでしたが、田口早生とゆら早生の栽培も始めました。

これからは、まだスプリンクラーを設置していない園地にスプリンクラーを設置したり、園内道を設置したりして更なる省力化を図っていきたいと思っています。

2. 農業への思い・取組

私の地域には、同世代や若い後継者が多く、農業士会やJA青年部にみんなが積極的に参加し、交流を深め、親睦を図っています。

通常、農家というのは、栽培技術に関しては秘密にするという傾向があると思うのですが、私達の仲間は、何でもお互いの意見を言い合っ、何かわからないことがあればみんな議論し合うという流れができています。だから、みんなが楽しくて前向きに農業と向き合っていると感ずます。これからもお互いに切磋琢磨しな

【農業経営の概況】

○作付品目と面積

柑橘	250 a
(宮川早生170a、田口早生30a、ゆら早生30a、ポンカン20a)	
梅	70 a

○労働力

家族 4人

がらがんばっていきたいと思います。

農業を始めたのも何かの縁、友達になったのも知り合いになったのも何かの縁、この縁を大切にしながら、一生、農業で生活ができるように、新しいことにチャレンジすることを忘れずにやっていきたいと思います。



みかんが
経営の主です



園地整備で省力化

県農業大学校学生です。

～1年生の自己紹介 第1回～

和歌山県農業大学校1年の秋場佑太です。

私が農大に進学した理由は、親の紹介もあり、農業を学んでみたいと思ったからです。一般実習で各コース（果樹、野菜、花き）を体験し、一番興味を持った花きコースを専攻に選びました。

花きコースで特に興味がある品目はカーネーションです。

将来は、本校で学んだことを活かした職業に就きたいと考えています。



秋 場 佑 太



油 谷 壮 太 郎

和歌山市出身の油谷壮太郎です。

趣味は空手です。

非農家ですが農業に興味があり農大に進学しました。

専攻は野菜コースでイチゴ栽培を担当しています。

農業は未経験でしたが、日々の実習等で農業の難しさを痛感しています。

和農大での実習や寮生活はとても楽しいです。



私は御坊市に住んでいて家は農業をしています。

幼い頃から家の仕事を手伝ううちに、将来は農業関係の仕事に就きたいと思うようになりました。

高校は、南部高校の園芸科で花や野菜について学びましたが、より詳しく学びたいと思い和農大に進学しました。

この2年間で、農業に関する知識や技術を学び卒業したいと考えています。



上 山 かな 恵



大 渡 俊 平

私の名前は大渡俊平です。

現在は、御坊市の叔父さんの所に住んでいますが、それまでは東京で暮らしていました。和歌山に来たきっかけは、専業農家である叔父さんが、「農業を手伝って見ないか」と言ってくれたことでした。

私は非農家だったのですが、叔父さん達に助けを頂きながら農業を体験する内に、農業について真剣に考え始め、和農大の門を叩きました。

和農大での授業や実習はどれも新鮮で、中でも生物工学に興味があり専門的な知識を身につけたいと考えています。

これからも色々な事を経験し良く学ぶことで、皆様方に追いつけるよう精進していく所存です。



私は、かつらぎ町に住んでいます。趣味は料理と手芸です。

私が農業大学校に入学しようと思ったきっかけは、自分自身で最初から農産物を育てたいと思い、その知識や技術を学ぶために入学しました。

将来の夢はまだはっきりしていませんが、たくさんの人に喜んでもらえるような農産物を生産したいと考えています。

そのためにも、農大での2年間に多くのことを学びたいと思います。



奥 野 美瑞歩



尾 崎 翔 太

海南市下津町出身の尾崎翔太です。趣味は野球観戦と音楽鑑賞です。

農大に入学した理由は、実家がミカン栽培の専業農家であり就農するための必要な知識や技術を身につけたいと考えています。

将来、ミカンのマルチドリップ栽培を導入したいと考えているので、その技術を学びたいです。

また、ミカン以外の品目についても栽培したいと考えているので、2年間で多くのことを学びたいと考えています。

私の取り柄は、こつこつ努力するところなので、今後も就農に向け努力して参ります。

私は印南町出身です。高校は紀央館高校でした。クラブ活動は中学では野球、高校ではバトミントンを行っていました。

趣味は、ドライブと音楽鑑賞です。

農大では、野菜コースを専攻しており、イチゴ栽培を担当しています。

就農に向け、2年間で多くのことを学びたいと思います。



片山卓哉



木下昂城

私は和歌山市出身で、実家は軟弱野菜などを中心に多品目の野菜栽培を行っています。

趣味はペット（「亀」）の世話と読書で、読書は戦記物やSFファンタジー小説が好きです。

農大では、野菜栽培を中心に学び、就農時に役立てたいと考えています。



私は橋本市出身で家は柿を栽培しています。

出身校は紀北工業高校の機械科です。なぜ、工業高校から農業大学校に入学したかということ、幼い頃に祖母の手伝いで野菜づくりを体験したからです。それ以来、野菜栽培について興味を持つようになり、将来の仕事にしたいと思い農大に入学しました。

後悔しないように、これからも一生懸命頑張っていきます。



小安未貢



谷 端 航 平

私は海南市に住んでいます。同じように入学した学生とは年齢が一回りくらい離れているので、大変なこともありますですが楽しく学校生活を過ごしています。

非農家なので農業に関する知識や技術は同級生に比べると足りない部分や知らないことがたくさんあるので、農大で学びたいと思います。

専攻コースは悩んだ結果、花きコースを選びました。花のことを学ぶのは勿論ですが、野菜や果樹についても幅広く学びたいです。



私は和歌山市毛見出身です。出身校は和歌山工業高等学校です。実家が野菜農家ということもあり、農大に進学しました。

中学、高校時代のクラブ活動はスポーツ系に入らず、ロボット製作を行っていましたが、幼い頃から家の手伝いを行っていたので体力的には自身があります。

現在の農業は、作業の省力化を図るため機械化が必要だと考えています。工業高校と農大で学んだ知識と技術を活かしていきたいです。



田 端 利 行



土 橋 弘 誠

私は紀美野町出身です。海南高等学校で硬式野球部に入り、勉強とスポーツを両立した高校生活を過ごしました。

農大では、果樹コースを専攻しています。特に柑橘栽培を中心に勉強し将来に活かしたいと思っています。

農大でしっかり学び、早く家を継いで親孝行したいです。

試験研究レポート

REPORT

ミニトマト葉かび病を発病しにくい 施設内環境づくりと効果的な薬剤防除で防ぐ

農業試験場 環境部 副主査研究員 大谷 洋子

1. はじめに

日高郡印南町などの県内ミニトマト産地では、葉かび病抵抗性をもたない品種‘キャロル7’を栽培しているため、本病発生による収量低下、着果不良や果実の肥大不足などが問題となってきました。本病の防除には、施設内を発病しにくい環境に制御し、殺菌剤の特性に基づいた効果的な薬剤散布を行うことが重要であるため、発病好適条件の解明と登録農薬の効果検討を行いました。

2. 発病好適条件の解明

1) 発病好適温度積算時間と発病との関係

日高郡印南町における多発生ハウスと少発生ハウスでは、発病好適温度とされる18～25℃の積算時間に明確な差は認められず、発病には次に述べるような湿度などの環境要因が及ぼす影響が大きいと考えられました。

2) 相対湿度100%保持時間と発病との関係

病原菌接種後の相対湿度100%（ビニル袋内が結露する状態）保持時間が少なくとも1時間あれば発病が可能であり、24時間以上継続することにより発病が増加すると考えられました（図1）。

3) 相対湿度と発病との関係

病原菌を接種したミニトマトを、4段階の湿度条件に設定したチャンバーに入れ、発病程度を調べた。相対湿度94%以上に比べて70～85%程度では発病がやや抑えられ、69%以下に推移すると発病は極めて少なくなりました（図2）。

4) 施設内環境条件と殺菌剤散布回数が発病に及ぼす影響

日高郡印南町内のミニトマト栽培施設では、循環扇未設置のパイプハウスで発病度が高く、循環扇を設置した鉄骨ハウスで低い傾向でした（図3）。パイプハウスでは殺菌剤散布回数が多いと発病が少ない傾向が認められたのに対し、鉄骨ハウスでは、殺菌剤散布回数と発病に一定の傾向はみられませんでした（図4）。相対湿度90%以上の積算時間（1月～4月上旬まで）の平均は、発病が多かったパイプハウス2棟が少なかった鉄骨ハウス2棟より長くなりました（パイプハウス：446時間、鉄骨ハウス：87時間）。

これらのことから、鉄骨ハウスではパイプハウスに比べ相対湿度が低く発病が少ないことが明らかになりました。また、循環扇の使用が防除に有効であることが示唆されました。

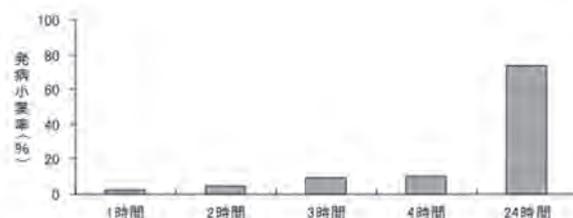


図1 病原菌接種後の相間と発病との関係

病原菌の胞子懸濁液を噴霧接種した後、相対湿度100%条件下に所定の期間置いた。各株の中心5複葉について発病小葉数を調査した。

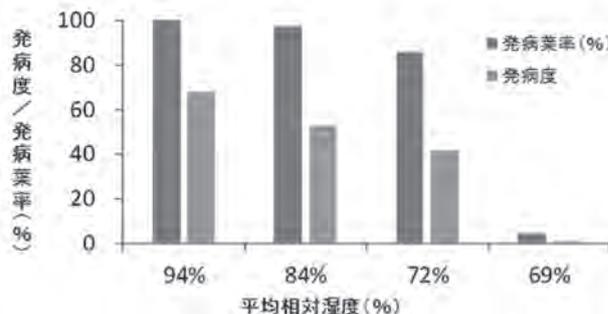


図2 相対湿度と発病との関係

病原菌の胞子懸濁液を噴霧接種し、所定の湿度条件のチャンバーに置いた。第1～4位複葉の発病を小葉ごとに下記指数によって調べた。

発病度 = $(\sum(\text{指数別発病小葉数} \times \text{指数}) / (\text{調査小葉数} \times 4)) \times 100$
指数：0：発病なし、1：小葉の25%未満に病斑、2：小葉の25～50%未満に病斑、3：小葉の50～75%未満に病斑、4：小葉の75%以上に病斑



図3 ハウスの種類および循環扇稼働台数と発病との関係

ハウスの種類と循環扇稼働台数が発病に及ぼす影響を調べた。6月下旬に収穫花房付近の200複葉を調査した。
 $発病度 = (\sum(\text{指数別発病複葉数} \times \text{指数}) / (\text{調査複葉数} \times 4)) \times 100$
 指数: 0; 発病なし、1; 複葉の1/3未満に病斑、2; 複葉の1/3~2/3に病斑、3; 複葉の2/3以上に病斑、4; 複葉全面に病斑



図4 殺菌剤散布回数と発病との関係

パイプハウスと鉄骨ハウスそれぞれ5ハウスにおいて、6月下旬に収穫花房付近の200複葉を調査した。
 発病度の算出方法は図3に同じ。

3. 殺菌剤の防除効果の検討

1) 予防効果

アフエットフロアブル、ペンコゼブフロアブルは病原菌接種 21 日前の散布でも高い予防効果が認められました。ダコニール 1000 は接種 14 日前の散布であれば効果は高くなりました。アミスターオプティフロアブルは接種 28 日前の散布でも高い効果が認められた。トリフミン水和剤は無処理に比べると効果はあるもののその程度はやや低くなりました (表 1、2)。

2) 感染後の発病抑制効果

感染後の散布でも発病抑制効果が認められたのはアミスターオプティフロアブルとアフエットフロアブルであった (表 3、4)。

4. おわりに

本研究により高湿度条件で発病が助長されることが明らかになったことから、施設内の相対湿度が高く推移しやすいパイプハウスでは循環扇を稼働させて発病しにくい環境にする。実際、ミニトマト産地では循環扇の導入が進み、近年は葉かび病の発生が少ない年が続いている。また、ペンコゼブフロアブルやアフエットフロアブルなど予防効果が高く残効が長い保護殺菌剤を組み合わせることで予防に努め、初発時にアミスターオプティフロアブルなど感染後の発病抑制効果が高い薬剤で病害の進展を抑えるなどして総合的な防除を心がけられたい。

表1 殺菌剤の予防的効果(少発生条件)

供試薬剤	希釈倍数	防除価		
		接種前散布		
		7日	14日	21日
アフエットフロアブル		97.0	93.3	86.4
アミスターオプティフロアブル	1000倍	97.2	96.3	91.2
ダコニール1000	1000倍	95.1	91.5	75.3
トリフミン水和剤	1000倍	74.7	55.8	52.3

殺菌剤を散布した後に病原菌の孢子懸濁液を噴霧接種し、予防的効果を調べた。発病度は下記により算出した。
 $発病度 = (\sum(\text{指数別発病複葉数} \times \text{指数}) / (\text{調査複葉数} \times 4)) \times 100$
 指数: 0; 発病なし、1; 複葉の25%未満に病斑、2; 複葉の25~50%未満に病斑、3; 複葉の50~75%未満に病斑、4; 複葉の75%以上に病斑

■ 防除効果が高い(防除価80以上)
 □ 防除効果がやや高い(防除価60~80)
 □ 防除効果が低い(防除価60未満)

表2 殺菌剤の予防的効果(多発生条件)

供試薬剤	希釈倍数	防除価			
		接種前散布			
		7日	13日	21日	28日
ペンコゼブフロアブル	1000倍	94.1	88.2	86.7	67.5
アミスターオプティフロアブル	1000倍	100.0	94.1	82.3	88.2

方法は表1に同じ。

表3 殺菌剤の感染後の発病抑制効果(中発生条件下)

供試薬剤	希釈倍数	防除価	
		接種後散布	
		3日	7日
ベルコート水和剤	6000倍	63.0	22.2
ゲッター水和剤	1500倍	38.9	0.0
アミスターオプティフロアブル	1000倍	100.0	98.1

病原菌の孢子懸濁液を噴霧接種した後に殺菌剤を散布し、感染後の発病抑制効果を調べた。防除価の算出方法は表1に同じ。

表4 殺菌剤の感染後の発病抑制効果(多発生条件下)

供試薬剤	希釈倍数	防除価	
		接種後散布	
		5日	9日
アフエットフロアブル	2000倍	61.0	47.3
ダコニール1000	1000倍	29.6	0.9
トリフミン水和剤	3000倍	13.7	0.0
アミスターオプティフロアブル	1000倍	96.5	85.5

方法は表3に同じ。

試験研究レポート

REPORT

カキ枝変わり新品種 ‘堀内早生’ の品種特性

果樹試験場かき・もも研究所 主査研究員 熊本 昌平

1. はじめに

9 月に出荷されるカキ ‘中谷早生’ は、高温時でも着色良好な優良品種ですが、年によっては小玉傾向や生理落果がみられます。また、樹勢低下に伴って着蕾数が増加し、摘蕾作業が繁忙化する等の問題があります。‘刀根早生’ の枝変わりで着色が早く、比較的栽培しやすいと考えられる品種 ‘堀内早生’ が品種登録されましたので、特性を紹介します。

2. 来歴と品種特性

‘堀内早生’ は、紀の川市において ‘刀根早生’ から果実の着色の早い枝変わりが発見され、平成 24 年 12 月 20 日に品種登録出願し、平成 26 年 3 月 6 日に品種登録（第 23121 号）されました。

収穫盛期は 9 月上中旬で ‘中谷早生’ と同時期で、‘刀根早生’ より 20 日程度早いです（表 1）。果実の特性についてみると、果実重は、‘中谷早生’ と同等かやや大きいが、‘刀根早生’ と比較すると生育期間が短いため小さいが、果形指数は、‘刀根早生’ や ‘中谷早生’ よりやや小さく、果形が腰高であることが特徴です（表 1、図 1）。

栽培上の特徴として、早期落果は、‘刀根早生’ より多く ‘中谷早生’ より少ないです（表 1）。また、着蕾数は、‘刀根早生’ と同程度で ‘中谷早生’ の約半数です（図 2）。

なお、現在のところ苗木の販売時期は、未定とのことです。

表 1 ‘堀内早生’ の特性

品種	年次	開花盛期	収穫盛期	果実重 (g)	果径(mm)		果形 ^z 指数	糖度 (°Brix)	早期落果 ^y (%)
					横	縦			
堀内早生	2011	-	9月12日	191	78	53	146	15.6	-
	2012	5月18日	9月6日	182	77	52	149	15.4	35
	2013	5月15日	9月12日	197	79	52	151	15.4	26
中谷早生	2011	-	9月14日	189	78	50	157	14.1	-
	2012	5月16日	9月6日	158	73	49	151	14.9	46
	2013	5月16日	9月12日	177	76	48	159	15.4	54
刀根早生	2011	-	10月6日	268	88	57	154	15.6	-
	2012	5月16日	10月4日	292	90	57	158	15.3	11
	2013	5月15日	10月3日	244	84	54	155	15.6	12

^z果形指数=横径/縦径×100

^y早期落果は開花期～6月下旬調査



図 1 ‘堀内早生’ 果実

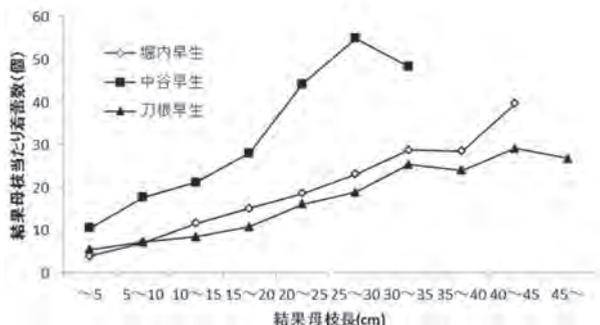


図 2 着蕾数の比較

試験研究レポート

REPORT

ウメすす斑病に対する各種薬剤の防除効果と効果的な防除体系の確立

和歌山県果樹試験場うめ研究所 研究員 武田 知 明

1. はじめに

本県のウメ産地では、完熟落果収穫の場合、薬剤の最終散布から収穫期までが長く、梅雨時と重なるため、多雨年にはウメすす斑病が問題となります。本病に対する登録薬剤は多いですが、各種薬剤の残効性や耐雨性についての知見は少なく、効果的な防除体系については明らかになっていません。そこで、各種薬剤の防除効果試験を行い、効果が高い薬剤を組み合わせた防除体系の実用性について検討しましたので紹介します。

2. 各種薬剤の防除効果と新体系の実用性

極めて多雨に経過した2011年と少雨の2012年に所内の10～11年生「南高」を供試し、10種類の供試薬剤を4月下旬以降約14日間隔で3回散布しました。ただし、ジチアノフロアブルは2014年8月28日現在の使用基準上、収穫前使用日数が長く、使用回数が1回と設定されているため、1回目のみの散布としました。調査は6月上旬以降定期的に行いました。その結果、キャブタン水和剤、ジチアノフロアブルおよびジフェノナゾール顆粒水和剤は、降雨の多少に関わらず防除価85以上の高い効果が認められました(表1)。

以上の試験結果と薬剤の使用基準などを考慮し、4月中旬にジチアノフロアブル、4月下旬にキャブタン水和剤、5月中旬にローテーション散布として系統の異なるクレシムメチルドライフロアブル、最終散布の5月下旬にジフェノナゾール顆粒水和剤を散布する新体系を考案し、その実用性について2013年に検討しました。その結果、対照の防除価は83.0であったのに対し、新体系では100となり、考案した新体系の実用性は高いと考えられました(表2)。

表1 各種薬剤の防除効果

供試薬剤	希釈倍数	2011年試験			2012年試験		
		発病果率(%)	発病度	防除価	発病果率(%)	発病度	防除価
キャブタン水和剤	800	5.7	1.5	96.8	0.0	0.0	100.0
ジチアノフロアブル	2,000	15.3	5.3	88.7	0.3	0.1	98.9
ジフェノナゾール顆粒水和剤	3,000	18.7	6.3	86.6	0.7	0.1	98.9
無散布		87.0	47.1		26.7	8.9	

(注) 試験場所:うめ研究所、1区1樹3反復

薬剤散布日:2011年は4月29日、5月13日、5月25日、2012年は5月1日、5月16日、5月28日に散布。ただしジチアノフロアブルは1回目のみの散布。

調査日:2011年は6月21日、2012年は6月27日。

調査方法:1樹につき100果(100果に満たない場合は全着果)について発病を程度別に調査し、発病果率および発病度を算出した。

防除価=100-薬剤散布区発病度/無散布区発病度×100

表2 新体系の実用性

試験区	薬剤散布日				調査結果(6/28)		
	4/16	5/1	5/13	5/24	発病果率(%)	発病度	防除価
新体系	ジチアノフロアブル	キャブタン水和剤	クレシムメチルドライフロアブル	ジフェノナゾール顆粒水和剤	0.0	0.0	100.0
対照	水和硫黄剤	ピラクロトリン・ホスカド水和剤	クレシムメチルドライフロアブル	ジフェノナゾール顆粒水和剤	7.5	1.8	83.0
無散布	水和硫黄剤	—	—	—	39.4	10.6	—

(注)試験場所:うめ研究所、1区1樹4反復

新体系:キャブタン水和剤、ジチアノフロアブル、ジフェノナゾール顆粒水和剤の3剤にローテーション薬剤としてクレシムメチルドライフロアブルを組み合わせ散布した。

対照:平成25年度農作物病害虫及び雑草防除指針に記載された防除事例を参考に薬剤を散布した。

無散布:黒星病対策として、4月16日に水和硫黄剤500倍を散布した。

調査方法は表1に準ずる。

3. まとめ

今回の試験で、本病に対する効果的な防除体系をある程度確立することができました。しかし、日当たりや風通しが悪く園内湿度が高い園地では、菌密度が高くなり、薬剤の十分な効果が得られない場合があります。そのため、整枝・せん定や排水条件の改善などの耕種的防除をしっかりと行った上で、薬剤による防除を適切に行うことが重要です。

臭化メチル剤全廃後の しょうが根茎腐敗病防除対策への取り組み

海草振興局 農業振興課

1. はじめに

施設しょうが栽培では、長年臭化メチルくん蒸剤を用いて土壌消毒を行って来ましたが、しかし、臭化メチルくん蒸剤の使用は2013年12月に不可欠用途を含めて全廃され、効果的な防除体系の確立が必要とされてきました。その後、代替薬剤としてヨウ化メチル剤が期待されていたが製造中止となり、既存の土壌消毒剤を使った総合的防除体系の確立が必要となりました。農業振興課では、しょうがの安定生産を普及指導計画の最重要課題の一つとして取り上げ、防除体系の確立に向け、農業試験場およびJAと連携して対策に取り組んでいます。ここでは、臭化メチル剤全廃前（平成21年度）と全廃後（平成26年度）に実施したアンケート調査の結果からみた現場の実態と、今後の対策について紹介します。

2. 臭化メチル剤全廃後の生産者の取り組み

平成21年度の調査では、ほとんどの生産者が臭化メチル剤を用いていました（図1）。臭化メチル剤全廃後は、ダブルストッパーやソイリン、クロルピクリン、ディ・トラペックス油剤などの薬剤に転換しています（図2）。

生育期の防除薬剤としては、ランマンフロアブルやユニフォーム粒剤、リドミル粒剤2などが用いられています（図3、4）。薬剤散布以外の取り組みでは、病株の抜き取りや板などでの遮断、発生力所へのビニール被覆などが行われています（図5）。

土壌消毒や薬剤による防除を実施しているにもかかわらず、約半数の生産者が根茎腐敗病の被害を受けており（図6）、主な原因としては、種しょうがによる菌の持ち込みや、土壌中に残存していた菌による感染が考えられています（図7）。

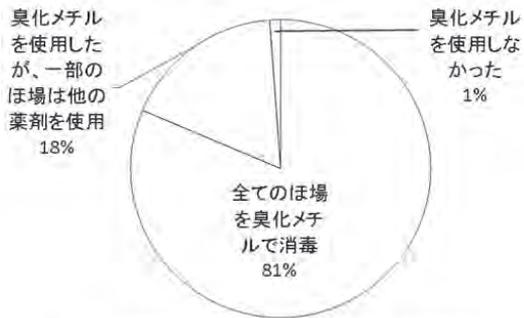
3. 総合的な防除体系確立の必要性と確立に向けた取り組み

現地で生産者の協力をいただき、根茎腐敗病防除対策試験等を実施しています。市街化区域等での土壌消毒では、処理時の臭気の発生が問題となる場合があります。刺激臭の少ない剤の中で土壌消毒効果を比較したところ、防除効果が比較的高く、使用時の刺激臭が少ないディ・トラペックス油剤が有望と考えられました。また温熱による土壌消毒の検討も行っています。生育期処理剤としては、ランマンフロアブルおよびユニフォーム粒剤を10日間隔で交互に散布することにより、根茎腐敗病の防除効果が向上することが明らかになってきました（図8）。

根茎腐敗病の防除には、土壌消毒と健全な種しょうがの確保、生育期処理、発病株の早期発見と処理など総合的防除技術の確立が必要です。これらの複数の取り組みを組み合わせることにより、被害の拡大を最小に防止する事ができると考えています。

4. 今後の取り組み

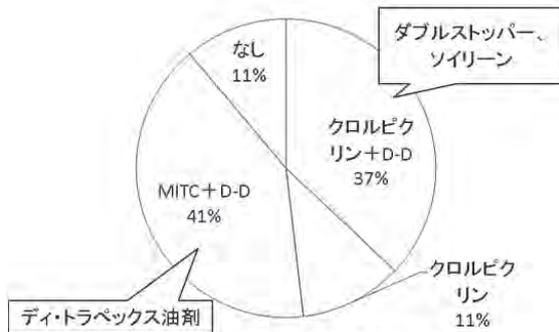
種しょうがによる根茎腐敗病菌の持ち込みを防ぐため、今後は産地全体で健全な種しょうがの安定確保の取り組みを行うことが必要です。種しょうが生産県との一層の連携強化、県内での種しょうが生産の検討などが必要と考えています。今後の普及活動では、種しょうがの安定生産を重点課題として、より一層の取り組みを進めていく予定です。



平成21年度調査 平成20年産の植え付け前の土壌消毒は？

図1 臭化メチル全廃前の土壌消毒

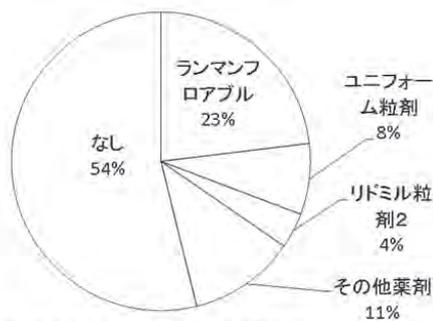
注) 平成21年度アンケート結果から



問 ショウガ作付前に使用した土壌消毒剤は何ですか？

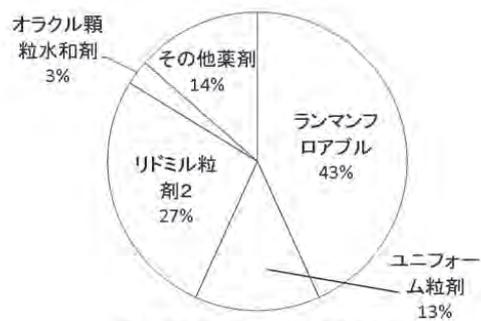
図2 臭化メチル剤全廃後の土壌消毒

注) 平成26年度アンケート結果から (図3以降も同じ)



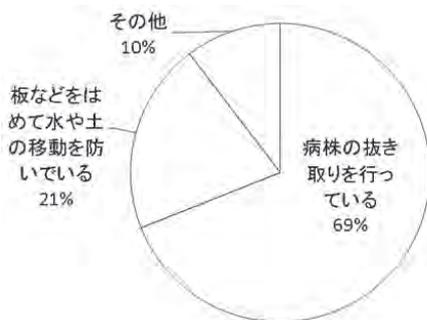
問 根茎腐敗病発生前の予防農薬散布は？

図3 生育期の防除(発病前)



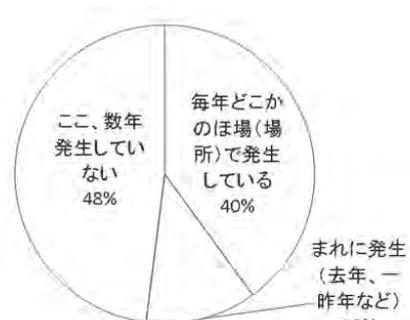
問 根茎腐敗病発生後の農薬散布は？

図4 生育期の防除(発病後)



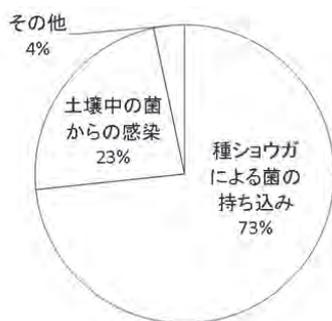
問 農薬散布以外の取り組みは？

図5 農薬散布以外の取り組み(発病後)



問 根茎腐敗病の発生状況は？

図6 根茎腐敗病の発生状況



問 根茎腐敗病の発生原因は？

図7 根茎腐敗病の発生原因

栽培中の防除体系の例



図8 栽培中の防除体系の例

(ランマンフロアブル+ユニフォーム粒剤)

普及活動レポート

REPORT

モモ産地の活性化～高糖度化、安定生産技術の普及～（平成25年度）

那賀振興局 農業振興課

1. はじめに

管内の桃産地強化のため、本県試験場で開発された高糖度モモ生産マニュアルの普及を図り、高糖度モモの安定生産を推進するため、現地調査、実証園の設置、研修会の開催などに平成24年度より取り組んでいます。

2. 普及活動の経過

(1) 現地調査

平成24年度に引き続き、現地調査園40園地にて生育調査（葉身長、葉面積、葉色、樹勢）、園地環境（園の明るさ、排水性）、土壌分析、施肥履歴・高糖度モモの生産チェックシートによるアンケートを実施しました。（図1、図2）

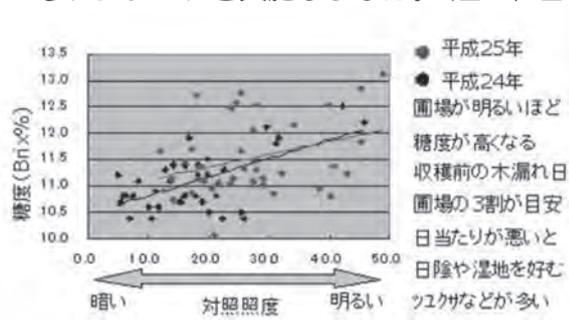


図1 園地の明るさと糖度の関係

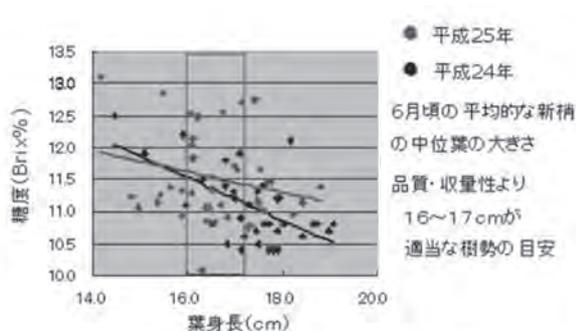


図2 葉の大きさと糖度の関係

(2) 実証園の設置

現地調査園より実証園6園地を選定し、うち2園地を深耕による排水性の改善効果と増肥、たこ壺、深耕等による樹勢回復効果の実証に取り組みました。

モデル園設置 改善策の実践(H25~)



モデル園 A(白鳳10年生)
・樹勢やや強
・葉身長17.8cm
・排水不良
→排水対策(深耕)



モデル園 B(白鳳13年生)
・弱樹勢
・葉身長14.4cm
・相対照度42%
→増肥、深耕、土壌改良資材



研修会（12月12日）

(3) 研修会の開催

12月12日に西部流通センターで現地調査40園地の農家を対象に研修会を開催しました。農業振興課普及グループからは、調査結果の報告と併せて改善策を提案しました。かき・もも研究所からは、核割れと枯死症の対策について、JA紀の里からは、今後の栽培管理や取り組みについて、それぞれ説明を行いました。また、3月4日にはあら川の桃振興協議会の生産者大会で、3月18日には和歌山県桃研究協議会の研修会においても同様に発表を行いました。

3. 活動の成果

チェックシートによるアンケート調査結果では、改善項目が増加した農家が54%となり、研修会等での啓発により排水対策など取り組みが進んでいると思われました。

表1の試験結果をみると、排水対策園では断根の影響より、生育が遅れ、対照区と比べ果重が小さく、糖度が低くなりました。今後、樹勢や果実品質について引き続き調査を行う必要があります。表2の樹勢回復対策園では増肥、たこ壺深耕等により、葉が大きく、新梢が長くなり樹勢が回復しました。(表1、2)

表1 モデル園A 調査結果

	葉身長 (cm)	葉色	相対照度 (%)	新梢長 (cm)
H24年	17.8	43.8	25.8	—
H25年	18.1	42.9	30.7	21.9
H25年深耕区	18.0	44.5	同上	28.2

※新梢長は、3樹調査 150新梢/樹を調査。H25.7.26。

	糖度 (Brix%)	果重 (g)	核割れ (%)
H24年	10.4	—	—
H25年	12.2	293.1	69
H25年深耕区	11.6	241.4	23

※H24糖度は選果場データ。H25は30果調査(H25.7.9)。

深耕による断根の影響が大きいと思われる。

表2 モデル園B 調査結果

	葉身長 (cm)	葉面積 (cm ²)	葉色	相対照度 (%)	腐植 (%)
H24年	14.4	36	45.2	42.2	3.2
H25年	17.2	48	40.1	18.0	3.2
H25新梢長調査 平均値 19.7cm (3樹調査 150新梢/樹) 10cm未満(38%)、10~30cm(37%)、40cm以上(25%)					



4. 今後の取り組み

今後、高糖度化については、これら実証園を中心として、改善策を提案し、その効果を実証し、既存技術を組み合わせ・改良して地域への普及に繋がっていきたいと考えています。また、生産安定対策として、砂地土壌モモ園における土壌改良有機物資材(ココナッツピート)の施用試験、交信攪乱剤(コンフューザーMM、ナシヒメコン)によるモモ害虫防除実証に取り組むとともに、川中島白桃を中心に発生している果肉障害(水浸状褐変症)についても研究機関と連携して取り組んでいきます。



ココナッツピート施用試験



モモ水浸状褐変

普及活動レポート

REPORT

桃狩り観光 11年目を迎えて

伊都振興局 農業振興課

1. はじめに

平成 12 年度に河南地区農産物加工販売組合（組合長 倉谷孝子、組合員数 31 名）を結成し、地元農産物を活かした加工品販売による女性起業活動を進めてきました。この女性起業と共に取り組んできました。土日朝市、桃・柿の直売活動を更に発展させるため、「桃」のもぎ取り体験観光に取り組むようになり、加工・販売・観光による都市（消費者）との交流を進め、河南地域の活性化に努めています。

2. 取り組みの経過、活動内容と成果

◆桃のもぎとり体験観光推進

平成 14 年に組合員の一人が手がけた「桃もぎとりと野菜の収穫体験を組み合わせた体験型観光 農業」をきっかけに、大阪市内の旅行会社と提携した「紀州路桃狩り体験バスツアー」を誘致し、受け入れ体制の整備を行いました。

その後、平成 16 年から本格的に桃狩り観光に取り組んでいます。



到着した観光バス

【組織図】

組合長 副組合長（2名） 会計	総務部	部長	連絡員 3 名
	販売部	部長	生産・出荷・販売担当、連絡員 3 名
	加工部	部長（副組合長兼）	会計 2 名（主、副）
	企画観光部	部長	

・企画観光部長は、観光会社との窓口業務、日程調整等を行い、観光受け入れ農家へバスの割り振り等全てを行う。

- ◎桃栽培農家 組合員 31 名の内
25 名（桃狩り観光受け入れ農家 10 名）
- ◎桃狩り観光期間 6 月 27 日～ 8 月 4 日（平成 26 年度）
- ◎桃狩り観光体験料 1,400 円
7 個（収穫体験 2 個、お土産 4 個、試食 1 個）
- ◎桃の直売 6 月 21 日～ 8 月 12 日（平成 26 年度）
毎日午前中、観光のある日は観光が終わる時間まで

◎桃狩り観光の推移

年度	平成 16 年	平成 20 年	平成 25 年
期間	6/28～7/29	6/20～8/13	6/22～8/11
客数	3,350 人	4,847 人	5,730 人
バスの台数	84 台	123 台	161 台



収穫し収穫した桃を持って



お土産に桃を

◎桃狩り観光手順

1. 主な観光会社を訪問（桃狩り観光のパンフレットと和歌山県の観光パンフレットを持参。訪問出来ない場合は、パンフレット類を送付する）
2. 桃狩り観光受け入れ農家の把握（時期、バスの台数）
3. 箱等資材の協同購入
4. パートさん、ガードマンさんの依頼
5. バス運行地区の区長さんに挨拶
6. 目ならし会（今年度の方針決定、清掃、箱等資材の分配等）

◆桃狩り観光で加工品を販売

「家族に食べさせたいお母さんの味」を商品化

◎商品は、金山寺みそ、田舎みそ、餅、こんにゃく、アイス、桃シャーベット、蒸しパン、柿ケーキ、桃ジャム、いちじくジャム、ブルーベリージャム、ちらし寿司等

◎加工原料を組合員または町内調達

桃、柿、さつまいも、紫芋、いちご、ブルーベリー等



加工品いろいろ

3. 今後の取り組み

- ・高齢化が進む中、組合員の中で桃を栽培している農家に観光に取り組んでもらうよう働きかけます。
- ・リピーターさんが増加している中、桃狩り観光と組み合わせて行く観光地が難しくなっているため、観光会社に新しい観光地を紹介します。

普及活動レポート

「おひさまとまと」のブランド化の推進

有田振興局 農業振興課

1. はじめに

有田川町生石地区では、夏季冷涼な気象条件を活かし雨よけ夏秋トマトが栽培されています。そして、平成 21 年 3 月には樹上完熟させた糖度 7 度以上の秀品果実を「おひさまとまと」として商標登録し、ブランド育成と販路拡大に取り組んでいます。しかし、近年の秋季の高温、多雨気象の影響もあって生産量が伸び悩んでおり、対策のひとつとして主力品種である「りんか 409」に替わる、より糖度の上がりやすい「おひさまとまと」生産に適した品種の選定が求められています。

農業振興課普及グループは、関係機関と連携し、出荷組合とともに生石地区に適した品種選定に取り組んできたので、その活動を紹介します。

2. 取り組みの経過、活動内容と成果

1) 平成 24 年度

高糖度で裂果の発生が少ない品種の選定を目的に、5 月下旬に現地の簡易雨よけハウスに主力品種「りんか 409」を含む 7 品種を定植、収量や果実品質などを調査しました。7 月には種苗メーカーを交えて現地検討会を開催し、各品種の栽培状況を確認、意見交換を行いました。

栽培試験の結果、「りんか 409」と比べて収量、果実品質が同等または優れ、裂果率が低く、「おひさまとまと」の割合が高い「桃太郎サニー」と「みそら 64」が有望と考えられました（表 1）。この結果を元に 12 月に検討会を開催、25 年作への上記 2 品種導入を決定しました。

表 1 収量、果実品質、裂果率、おひさまとまと率

品種	収量/株 (kg)	果数/株 (果)	1果重 (g)	糖度 (%)	裂果率 (%)	おひさま率 (%)	評価
桃太郎サニー	4.35	29.2	146.1	6.33	4.0%	12.6	○
CF桃太郎ヨーク	3.85	26.2	146.9	6.21	5.9%	12.6	
桃太郎セレクト	3.70	24.4	151.5	6.32	10.3%	12.7	
桃太郎ギフト	3.18	21.7	146.4	6.29	9.7%	10.4	
みそら64	4.45	29.8	149.4	6.29	2.8%	12.8	○
麗夏	4.59	30.7	149.4	5.88	3.3%	2.6	
りんか409(対照)	4.39	30.4	144.6	6.05	9.0%	9.7	

注) 調査期間：平成 24 年 7 月 24 日～11 月 29 日



園地巡回



出荷目揃え会

2) 平成 25 年度

主力品種である「りんか 409」に「桃太郎サニー」と「みそら 64」を加えた 3 品種を中心に現地栽培がスタートしました。さらに、生産者の高齢化に対応するため、管理作業の省力化を目的として 5 月下旬に現地の簡易雨よけハウスに、トマトトン処理が不要な単為結果性品種「パルト」を定植、「りんか 409」を対照に果実品質などを調査しました。

新たに導入した 2 品種のうち、「みそら 64」は傾斜畑での水分管理が難しく、水田転作園向きと判断され、生石地区には不向きと考えられました。

また、「パルト」については、「りんか 409」に比べ果実重は軽いが、糖度がやや高く、裂果が少なくなりました（表 2）。しかし、達観及び聞き取り調査では、「りんか 409」と比べ尻腐れ症が多く発生しました。この結果、「パルト」はトマトトン処理が不要で省力的な品種であるものの、果実重が軽いこと、尻腐れ症の発生が多かったことから、導入にあたっては灌水など栽培管理方法の検討が必要だと考えられました。

表 2 果実品質、裂果率

品種	果実重 (g)	糖度 (Brix%)	裂果率 (%)
パルト	148.4	7.1	15.9
りんか409	166.3	6.6	24.4

注) 調査期間：平成 25 年 9 月 11 日～11 月 21 日



栽培検討会

3. 今後の取り組み

平成 26 年度の栽培品種は、「りんか 409」を中心に平成 24 年度試験で選抜した「桃太郎サニー」の 2 品種となっています。また、新品種 1 系統を出荷組合役員の圃場で栽培しており、果実品質調査を実施する予定です。

農業振興課普及グループでは、引き続き出荷組合や関係機関と連携し、有望品種選定などの現地試験を実施するとともに、販売促進活動等の支援を行い、高糖度トマトの生産量拡大に取り組んでいきます。



簡易雨よけハウス



「おひさまとまと」出荷容器

普及活動レポート

REPORT

キヌサヤエンドウ新品種‘紀州さや美人’の普及に向けた現地適応性の検討

日高振興局 農業振興課

1. はじめに

日高地方は、県内最大のキヌサヤエンドウ産地であり、約50haが栽培されています。現在栽培されている品種‘美笹’は、果梗の基部に小型の葉（小ほう）が付きやすい特性ですが、これを出荷前に手作業で取り除くため、長時間の出荷調製作業が栽培農家の大きな負担となっています。

このような状況の中、暖地園芸センターにおいてキヌサヤエンドウの新品種‘紀州さや美人’が育成されました。‘紀州さや美人’は小ほう発生が少なく、出荷調製作業の省力化が期待される品種であり、暖地園芸センターにおける試験では初期収量や秀品率にも優れる一方で、草勢がやや弱く収量性が同等かやや劣ることが示されていました。

そこで、農業振興課普及グループでは‘紀州さや美人’の産地での普及に向けて試験圃を設置し、現地適応性について検討を進めているので、その経過を紹介します。

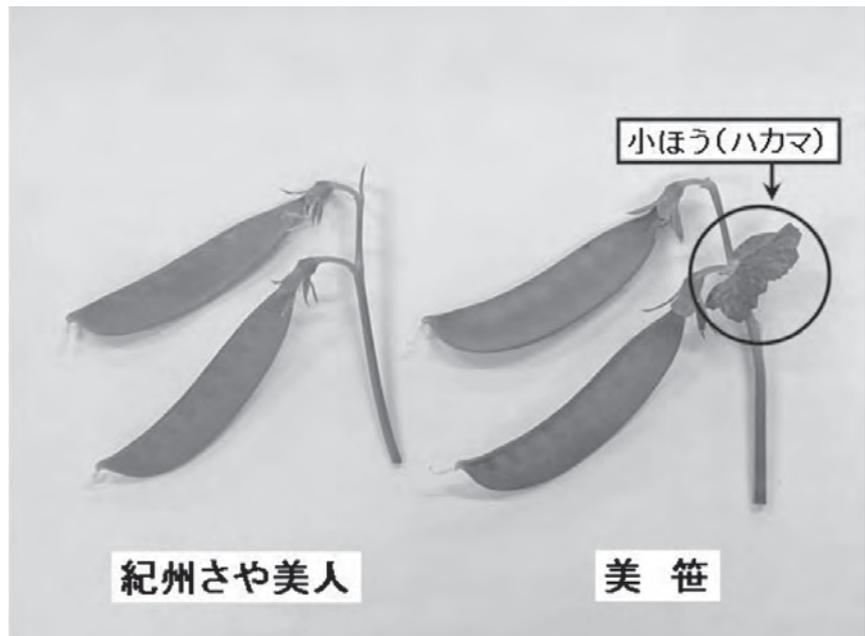


図1 紀州さや美人と美笹の莢形態および小ほう発生

2. 取り組みの経過、活動内容と成果

産地での代表的な露地作型である「夏まき年内どり作型」（8月中～下旬に播種、年末の需要期まで収穫を行う作型）について、‘紀州さや美人’と‘美笹’の比較を行いました。平成24年8月中旬に播種し、10月上旬から12月下旬まで2週間ごとに生育状況（草丈、主枝着蕾数、開花花房の小ほう発生率）を調査するとともに、定期的に収量やL莢率について生産者から聞き取り調査を行いました。また、‘紀州さや美人’は、‘美笹’に比べやや草勢が弱いため、草勢維持のために追肥を中心に総施肥量を25%増量（窒素成分換算）としました。

‘紀州さや美人’は、栽培期間を通して‘美笹’よりも草丈が低く、主枝着蕾数も少なく推移しました。開花花房への小ほう発生率をみると、収穫開始した10月上旬には‘美笹’、‘紀州さや美人’ともに100%、70%と高かったが、10月中旬には‘美笹’が未だ77%と高い水準にあったのに対し、‘紀州

さや美人’は5%まで急激に低下しており、以後もほとんど小ほう発生は認められませんでした。

また、‘紀州さや美人’は‘美笹’よりも2日早い9月26日から収穫開始し、10月末までの出荷量が総出荷量の約半分を占めるなど初期出荷量の高さが際立ちました（同時期の‘美笹’で総出荷量の36%）。出荷量のピークは両品種とも10月下旬で、その後は気温低下に伴って減少しました。収量は‘紀州さや美人’が約1.1t/10aと‘美笹’を上回ったほか、総出荷量に占めるL莢率も‘美笹’を10%以上上回りました。

3. 今後の取り組み

以上の結果から、‘紀州さや美人’は夏まき年内どり作型において、追肥を重点とした施肥体系により草勢維持に努めることで、‘美笹’と変わらない収量性を確保できると推測されました。

また、小ほう発生率の低さ・初期収量性の高さ・秀品率の高さといった‘紀州さや美人’の利点は今回の試験においても安定して発揮されており、十分な現地適応性を有する品種であると判断されました。

今後は、‘紀州さや美人’の草勢維持に最適な施肥体系についてさらに検証を進めるとともに、無霜地帯で行われる冬春どり作型のように、長期にわたって栽培・収穫を行う作型についても、‘紀州さや美人’の現地適応性を検討していきたいと考えています。

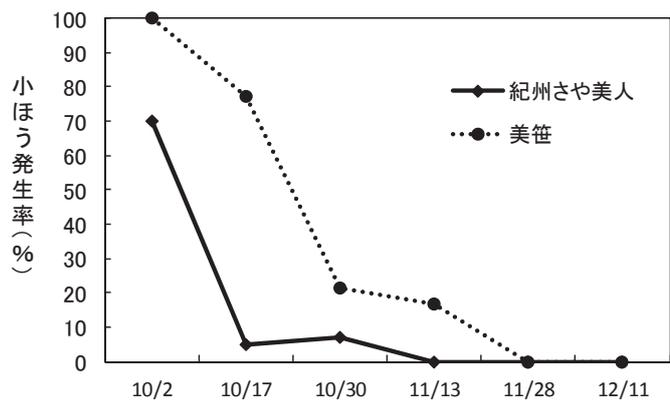


図2 紀州さや美人と美笹の小ほう発生率

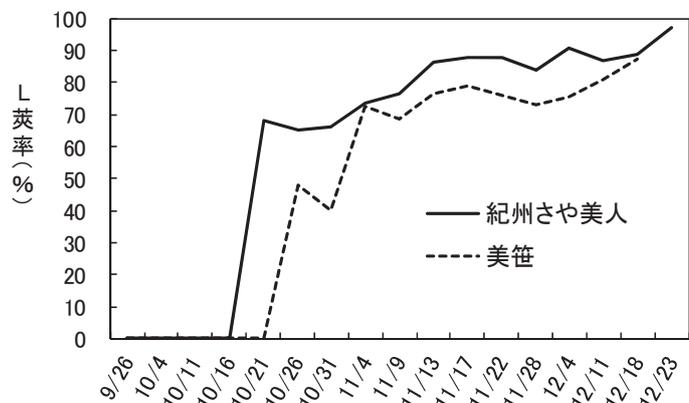


図3 紀州さや美人と美笹のL莢率

表1 ‘紀州さや美人’と‘美笹’の総出荷量

		出荷量(kg/10a)			
		L	S	Ⓐ	計
紀州さや美人	出荷量	689.1	181.8	231.4	1,102.3
	占有率(%)	62.5	16.5	21.0	
美笹	出荷量	445.6	257.3	181.8	884.7
	占有率(%)	50.4	29.1	20.5	

※)・播種日:H24/8/12(印南町内露地圃場)

・出荷期間:H24/9/26~12/23

・L莢:長さ5.5cm~8cmで若莢のもの

普及活動レポート

REPORT

龍神地域における新規特産品づくり

西牟婁振興局 農業振興課

1. はじめに

田辺市の山間地域では、農業者の高齢化や担い手の減少、耕作放棄地の増加等が問題となっています。農業振興課普及グループでは林務課の協力を得ながら、山間地域における農業者所得の向上を図り、地域の営農活動を維持するため、新規農林産物の導入やそれを活用した加工品開発等を普及計画の課題として取り上げ、6次産業化に向けた取り組みの支援を行っています。

2. 取組の経過、活動内容と成果

1) 新規農林産物の栽培技術確立

山間地域の導入品目として、コシアブラやイタドリ等の山菜、金ゴマやサトイモの栽培実証園を設置し、栽培技術の確立と地域への導入推進を行いました。

①コシアブラ

シキミ・サカキの林間地及び水田の耕作放棄地で遮光栽培の実証園を設置し、生育状況の確認を行いました。その結果、林間地では生育が良好でしたが、遮光栽培では生育にバラツキがあり、新芽の枯死等もみられました。

②イタドリ

イタドリの山畑での生産拡大を図るため、挿し木による苗の増殖を行いました。今後、これらの苗をほ場に定植し、生産拡大に向けて栽培方法の検討を進める予定です。

③金ゴマ・サトイモ

金ゴマの増収生産やサトイモの大玉化を図るため実証園を設置し、栽培技術向上のための講習会を開催した結果、収量の増大を図ることができました。

これらは地域の加工品の原料として利用されており、生産量の拡大のため、今後も栽培の推進を行う予定です。

2) 加工品の開発検討

加工品の開発に向けての指導を行った結果、金ゴマは加工商品が完成し、販売を開始しました。サトイモは焼酎加工用原料として活用されていますが、焼酎加工用以外の小粒のものは地元でコロッケやケーキ等に加工し販売しています。

イタドリは加工品利用への検討を行うとともに、商品の付加価値を高めるため、機能性成分の



コシアブラの生育状況



金ゴマ加工商品

分析を行いました。その結果、花と茎にケルセチンというポリフェノール類が含有されていることが示唆されたので、加工品への有効利用について期待されます。

3) オリジナル弁当の検討・試作

地元で生産された食材等を使ったレシピの提案等、商品化に向けて支援を行いました。オリジナル弁当は「企業の森」等で販売する等、弁当販売は順調に進んでいます。

3. 今後の取り組み

金ゴマ及びサトイモは、今後も地域での栽培指導を行い、生産者や加工グループと連携を図りながら、栽培技術の向上と地域での栽培面積の拡大、新たな加工品開発を進めていく予定です。

コシアブラは、林間地での導入推進を図りながら、栽培技術の検討を行います。

イタドリは、山畑での生産拡大を図るため、挿し木による苗の増殖方法や栽培方法を検討し、加工品利用についても検討を進めていきます。

女性起業活動への支援

1. はじめに

農山漁村における女性の起業活動への支援を行うことを目的に、農業振興課普及グループでは、加工技術習得への支援や、女性起業家との情報交換・交流活動への支援を行っています。管内で女性起業している方及び起業を志す方を対象とし、公募で参加者を募り、加工講習会等を開催しました。



加工講習会

2. 取組の経過、活動内容と成果

第1回は、1月29日に岩出市生活研究グループ加工部会長の福田清子氏を講師に招き「ふるさとの味を伝えたい～手作り品で地域おこし～」と題した講演会を開催しました。参加者は30名で、講師からは、加工場整備を行ったこと、味噌づくり体験が好評であること、消費者との交流活動が活発であること等の話を聞きました。

第2回は、2月18日に田辺市龍神村の竹内雅一氏を講師に、柑橘ジャムの作り方の講習を行いました。キンカン、ペにばえ、はるみ、安藤柑、ハッサク、レモンの6種類の柑橘の加工を行いました。参加者は30名で、講師から、柑橘の果皮の厚さや糖度に合わせた加熱の仕方等を教わりました。できあがったジャムは色鮮やかで照りもあり、大変美味しく仕上がりました。参加者達は「プロの技」を習得するために目をこらしてメモを取り、講師に質問したりして熱意を感じる講習会となりました。

3. 今後の取り組み

今年度も、公募により参加者を募り、商品をブラッシュアップ出来るよう、売れ筋商品の調査、女性起業家への先進地調査等を行う予定です。

普及活動レポート

REPORT

「なんたん蜜姫」のこれから

東牟婁振興局 農業振興課

1. はじめに

東牟婁地域では、サツマイモは気象災害に強く、土質も比較的選ばずに栽培しやすいことから多くの家庭で栽培されています。中でも串本町では「さいぱん」と呼ばれる良食味のサツマイモがこの地でのみ栽培されてきました。しかし、同町の耕作放棄地は 168.7ha と東牟婁地域の 41% を占めています。

そこで、耕作放棄地解消に向け、サツマイモを栽培振興品目とした取組を行ってきました。前回に引き続き、その活動を紹介します。

2. 活動内容と成果

1) 系統選抜

平成 21 年に串本町内のサツマイモ栽培者を中心に「串本さつまいも会」を設立しました。会員から集めたサツマイモ「さいぱん」の中からさつまいも会、JA 紀南、農業試験場と連携しながら系統選抜試験を重ね、収量・品質の良好な 2 系統を選び出しました。最終的には選抜された 2 系統のうち、1 系統について品種登録をする予定です。

今後、選抜された優良系統の増殖を行っていくにあたり、育苗時の生育特性で不明な点が多いため、今年度はこの生育特性を把握するための調査を行いました。

種いもは 2 系統ともに 2 月 24 日に植付け、トンネル被覆を行いました。3 月 13 日の発芽後、地上部が 30 cm 以上になったツルから切り取りました(図 1)。ツルの初収穫は 4 月 22 日で系統②-1 が早かったものの、6 週間後からは系統 C が切り取るツルの本数が多くなりました。

2) 商標登録

JA 紀南が、販売しているサツマイモについて「なんたん蜜姫」として商標登録を出願し、本年 1 月に商標権を取得しています。

(※商標登録：出願し、登録されると登録された名称は権利者に無断で使用できなくなる。)

3) 高品質化

現在、串本さつまいも会を中心に JA 紀南にサツマイモが出荷されていますが、品質のばらつきが大

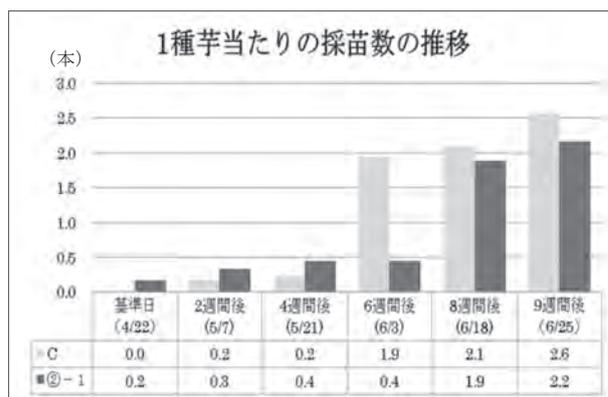


図 1 種いも 1 個あたり採苗本数



作出されたメリクロン苗

きく効率的な出荷体制がとれていません。そこで、JA 紀南直営農場において、選抜された系統の種芋の増殖に向けた栽培を始めました。栽培するサツマイモの系統を統一することで品質を安定させ、効率的な生産を目指すことができます。

また、JA 紀南では、選抜された優良系統を茎頂点培養によりウイルスフリー化する取組を試験的に始めました。これによりウイルスが原因の病害・障害による品質低下が軽減され、高品質なサツマイモが生産可能となります。現在、ウイルスフリー化された苗を使って生育、収量の比較試験を行っているところです。

3. 今後の取り組み

品種登録に向け、JA 紀南、農業試験場、農業振興課による現地調査を行っています。栽培するサツマイモを選抜された優良系統に統一することで、品質の向上・収量の増加が期待できることから、商標登録されたことと併せて今後さらに「なんたん蜜姫」のブランド化に向けた支援を行っていきます。



農業試験場での育苗状況



農業試験場との現地調査



系統選抜試験ほ場



串本さつまいも会総会

地域の逸品!!



この付近にマコモタケが出来ます

1. 商品の紹介

平成 24 年から海南市海老谷でマコモを栽培しています。海老谷地区は海南市東部の棚田が広がる静かな集落ですが近年は休耕田が増加し景観が悪化していたこともあり、直売所で販売する手軽に栽培できる新品目を検討していたところ、JA や振興局、農業試験場からマコモを勧められ栽培に挑戦しました。

今年で 3 年目になりますが生産者が増加し、地元 JA 直売所では毎年試食販売を行い PR に努めています。

マコモは中国・東南アジアの沼地に自生するイネ科の多年生植物で、草丈は 2m を超え、秋になると地際近くの茎が肥大化して「マコモタケ」と呼ばれる柔らかい乳白色の茎になります。マコモタケは中華料理の高級食材として使われています。



直売所での販売状況

2. 販売先等

JA ながみね直売所「とれたて広場」で 9 月下旬から 10 月中旬に販売しています。

地域の逸品!!

九度山町
柿娘(かきっこ)グループの
柿加工品

紹介者 九度山町 指導農業士
森 脇 佐太代



1. 商品の紹介

九度山町を代表する特産品は、「おいしさ日本一を誇る富有柿」で、品質のよい大玉果実を生産するため徹底した摘果作業を行います。この摘果柿を利用し「産品づくりを行い、町を訪れる観光客の土産物が出来ないか」農家の主婦仲間が話し合い、摘果柿のかす漬けの試作を契機に柿を使った加工品づくりと地域振興を図る目的に町内に呼びかけ柿娘グループ(代表 玉置恵子)を結成しました。その後、商品開発に取り組み、柿のかす漬け、柿しるっぴ、柿みかんジャム、柿娘漬けが商品化されました。販売は道の駅「柿の郷くどやま」でしていますので、是非購入して下さい。

2. お問い合わせ先

道の駅「柿の郷くどやま」で販売しています。

〒648-0161

住所：和歌山県伊都郡九度山町入郷 5-5

TEL：0736-54-9966 FAX：0736-54-9970

3. 商品の規格と価格

- | | | |
|-------------|-------|----------------------|
| (1) 柿のかす漬け | 250 g | 450 円 (税込み価格) |
| (2) 柿しるっぴ | 200 g | 540 円 (税込み価格, お試し価格) |
| (3) 柿みかんジャム | 200 g | 324 円 (税込み価格) |
| (4) 柿娘漬け | 150 g | 324 円 (税込み価格) |

地域の逸品!!

📌 ゴーヤをつかった
アイデアレシピ

ゴーヤの佃煮

★ 紹介者 日高川町 地域農業士
瀬戸 佐知子



ゴーヤは、特徴的な苦みと豊富なビタミンCを含んでおり、夏バテ予防に最適な野菜といわれています。

日高川町では、夏場に収穫ができ、かつ、作りやすい野菜として、平成 11 年から栽培を開始し、現在では、露地栽培を中心に夏場の主要作物となっています。我が家でも、産地への導入当初から栽培しており、現在は 6a の面積で栽培しています。

ゴーヤ料理といえば一般的にはチャンプルーが有名ですが、ここではアイデアレシピとして「ゴーヤの佃煮」を紹介します。皆さん、県内の新鮮なゴーヤを使って、是非一度作ってみてください。



◎ゴーヤの佃煮レシピ

○材料

- ・ゴーヤ・・・・・・・・500g
- ・かつおぶし・・・・・・・・10g
- ・かえりちりめん・・20g
- ・炒り白ごま・・・・大さじ3
- ・五倍酢・・・・・・・・20cc
- ・調味料
 - 三温糖・・・・・・・・150g
 - 薄口しょうゆ・・30cc
 - 濃口しょうゆ・・30cc

○作り方

- ①ゴーヤを半分に切り、種とわたを取り除く。
- ②5mm くらいの厚さに刻む。
- ③軽くゆがき、冷ます。
- ④固く絞って、水気を切る。
- ⑤調味料をすべて合わせ、煮立てる。
- ⑥ゴーヤ・ちりめんを入れる。
- ⑦煮汁がだいたいなくなるまで、煮詰める。
- ⑧火を止め、かつお節を入れて残りの水分を吸わせ、最後に白ごまを入れる。

地域の逸品!!

負けないぞ “熊野川”
「熊野川の味噌」復活

紹介者 新宮市 指導農業士
道 阪 耕 一



今回、紹介させて頂く逸品は「熊野川の味噌」です。

「熊野川の味噌」は昭和 50 年代に旧熊野川町の女性グループが協働作業で作ったのが始まりです。昭和 60 年からは加工施設を確保、営業許可を取得し販売を開始。商品は町内の産品販売所や量販店などで好評を得ておりましたが、平成 23 年 9 月の台風 12 号で加工施設・器具を流失し、製造中止を余儀なくされてしまいました。

被災後、新宮市熊野川町では「負けないぞ “熊野川”」を合い言葉に営農団体や地域づくり団体が多く立ち上がり、生産・加工活動や交流活動など地域活性化に向けた活動を展開しております。

また、今年 1 月には JA みくまのが地域農林業者に活用していただくとう既存施設の熊野川営農センターの 2 階部分を地域産物加工施設に整備しました。

その施設を利用して地元の女性グループが混成チーム「熊野川ふるさとキッチン」を立ち上げ「熊野川の味噌」を復活させました。現在、新宮市と那智勝浦町の A コープ店、新宮市熊野川町にある「かあちゃんの店」で販売しています。麦こうじを仕込んだ「おぎ味噌」と米こうじを仕込んだ「米味噌」の 2 種類です。

農業士会支部活動レポート

REPORT

平成26年度和歌山県農業士会連絡協議会県外研修

～木質バイオマスの地域内循環、
担い手育成に取り組む大規模多角経営を視察～

9月8日（月）～9日（火）、県農業士会連絡協議会では、岡山県真庭市の真庭市役所、株式会社銘建工業、清友園芸、兵庫県姫路市の夢前夢工房の視察を実施、31名が参加しました。

(1日目)

真庭市について

真庭市は人口約5万人、鳥取県との県境に位置し、森林が市面積（828km²）の7割を占めています。

市内には製材業者が多いことから、毎日発生する大量の製材くずをペレットに加工するなどして、発電や冷暖房の燃料にする木質バイオマスの活用が推進されています。農業分野では、ペレットボイラー導入費用の一部助成が行われており、現在4戸が導入しています。

今回の研修では行政、企業、農業者から話を

聞くとともに、燃料の製造と利用の現場を見学しました。

木質バイオマス燃料の製造と発電 ～株式会社銘建工業の取組～

銘建工業は集成材製造国内大手で、自社と市内製材事業者から出るからの製材くずを原料に、自社発電とペレットの製造を行っています。ペレットは表皮を含まないホワイトペレットで、農業用のボイラー燃料に利用されるのは主に直径6mm、販売価格は1kgあたり25～30円（運賃別）でした。



製材・集成材の製造
(集成の製造では、加工時に材
料の約20%のくずが発生する)



製材くず
(表皮、切れ端、かんなくず など)



ペレット
(かんなくずから製造)



企業で利用(発電)



農業等で利用

木質バイオマスの農業利用

～清友園芸（施設・大玉トマト）～

見学した施設の面積は 150 坪で、2 重カーテンが装備されていました。園主の清友氏の説明では、①冬場でもあまり雪が降らないため、設定温度 12℃の加温で十分栽培が可能、②設置され

たペレットボイラーの導入費用は 450 万円程度（ボイラー 350 万円、サイロ 100 万円）、③サイロは満杯で約 2 週間の運転が可能、④ボイラーは自動点火で加温は安定しており、灰の取り出しは 3～4 日に 1 回程度でよいとのことでした。



園主の清友氏（奥）
（経営面積約 1.6ha（施設を含む）、隣接の直売所も経営。ペレットボイラー3台導入）



ハウス全景
（ハウスは単棟、燃料のペレットはサイロ（容量 3t）からスクリュウ方式で自動供給）



ペレットボイラー
（右上から燃料供給、右下扉から灰取り出し）

（2日目）

有限会社夢前夢工房

夢前夢工房が指定管理者を務める姫路市農業公園内にある「夢やかた」で、社長の衣笠愛之氏から、①経営の概要と企業等と連携した 6 次産業化、②研修生受入や、地域の若手農業者向け直

売所の開設など担い手の育成、③地域の将来ビジョンなどについて伺った後、植え付け作業が行われている観光いちご園の施設内を見学しました。



社長の衣笠氏
（兵庫県農業士、姫路市農業委員）



観光いちご園 ハウス内部
（養液土耕、視察時に植え付け中）

経営規模：
水稲 28ha（特別栽培を含む）、そば 48ha、小麦 16ha、大豆 7ha、野菜 1ha、イチゴ 35a、ブドウ 20a。

研修生：
現在 9 人を受入。

その他：
加工品製造は全て外部委託

研修を終えて

今回の研修では、参加者が「研修先にあって自分（の地域）にないものは何か」という視点で質問をする姿が印象に残りました。地域農業

のリーダーである農業士として、自らの農業経営だけでなく、地域の将来像についても考えるこの姿勢が、今後の活動に活かされることが期待されます。

農業関係制度の紹介・お知らせ

「農地中間管理事業」による農地の貸借を始めました

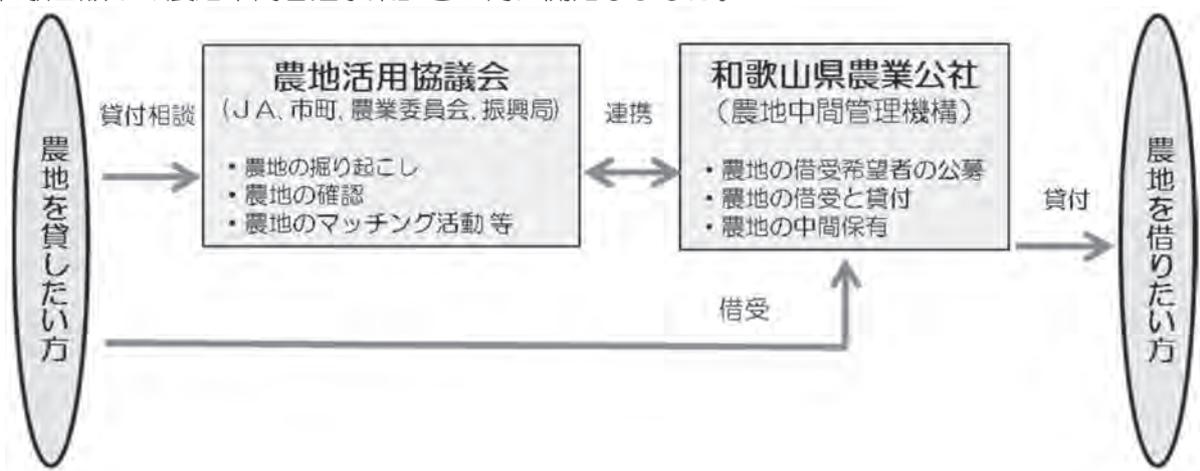
～あなたの「貸したい」「借りたい」をサポートします～

公益財団法人和歌山県農業公社
(農地中間管理機構)

1 はじめに

内閣府と農林水産省などが連携して、農業・農村全体の所得を10年間で倍増させる事を目指した施策展開を図るための「農林水産業・地域の活力創造プラン」が平成25年度末に発表され、その柱の一つとして、農地の集積を加速化するための「農地中間管理機構」の新設とその事業推進が打ち出されました。

これを受け和歌山県では、公益財団法人和歌山県農業公社（以下「農業公社」と記す。）を農地中間管理機構に指定するとともに、地域段階には農業者との結びつきが強いJAを核に、市町、農業委員会等で構成する「農地活用協議会」を県内全域に設置し、農業公社と地域、そして県が一体となった和歌山版の「農地中間管理事業」を7月に開始しました。



2 農地中間管理事業の流れ

この事業では、農業公社が一旦農地を借り受け、農業公社へ農地を借りたい旨を応募頂いた希望者の中から一定のルールに基づき借受者を選定、貸し付けを行います。要は、地主と借受者の間に農業公社が介在する点が、これまででない取り組みです。

(1) 農地を借りたい方 (受け手)

農業公社が実施する借り手募集(年4回(3、6、9、12月)実施予定。)へ応募して頂きます(「〇〇町」で「△a程度」の「みかん園」を借りたい等、希望条件を登録します。)

応募の受付は、各時期に農業公社のホームページや最寄りのJA、市町の窓口で行います。
※応募頂いても、希望に添った農地がすぐに見つからない場合がございます。

(2) 農地を貸したい方 (出し手)

最寄りのJAで貸したい農地の相談を随時、個別に受け付けています。
※相談を受けた農地を公社がすぐに借り入れるものではありません。

(3) 借受者（受け手農家）の決定

受け手農家の希望条件と貸し付け希望農地の情報を基に、農業公社が定める基準により受け手農家と順次協議を行い、借受者を決定します。

3 農地中間管理事業のメリット

この事業で農地を貸借すると、農地の出し手農家や地域、受け手農家にメリットが受けられる場合があります。また、公的機関の農業公社との契約となるため、貸し手と借り手双方の手間が軽減されるとともに、安心感が得られます。

①地域に対する支援 (地域集積協力金)

地域内の農地の一定割合以上を機構に貸し付ける場合

2割超～5割以下	2.0万円 / 10a
5割超～8割以下	2.8万円 / 10a
8割超	3.6万円 / 10a

②経営転換・リタイアする出し手に対する支援(経営転換協力金)

出し手の全自作地を10年以上機構が借受け、担い手農家に貸付けが行われる場合

0.5ha以下	30万円 / 戸
0.5ha超～2.0ha以下	50万円 / 戸
2.0ha超	70万円 / 戸

※自作地に遊休農地がある場合は対象外となります

③農地の集積等に協力する出し手に対する支援(耕作者集積協力金)

機構の借受農地に隣接する農地等を10年以上機構が借受け、担い手農家に貸付けが行われる場合

2万円 / 10a

④農地を集積した受け手に対する支援(和歌山版農地活用総合支援事業)

6年以上の利用権設定等を行い、果樹等の永年作物を生産する場合

2万円 / 10a

※傾斜度15° 以上の場合3千円 / 10aを加算

4 まとめ

地域農業のリーダーである農業士の皆様には、当事業の概要をご理解いただくとともに、ご自身の経営改善の際には是非ご活用を検討願います。

また、地域で「農業の担い手が少ない」「遊休農地が増えている」とお考えの皆様も一度ご連絡ください。地域の人・農地の将来について一緒に考えさせていただきます。

詳しくは、最寄りのJA、又は農業公社までお問い合わせください。

公益財団法人和歌山県農業公社(農地中間管理機構)

和歌山市茶屋ノ丁2-1

TEL(073)432-6115 FAX(073)422-4031

<http://www.w-apc.or.jp> E-mail: wanouko@alpha.ocn.ne.jp

農業関係制度の紹介・お知らせ

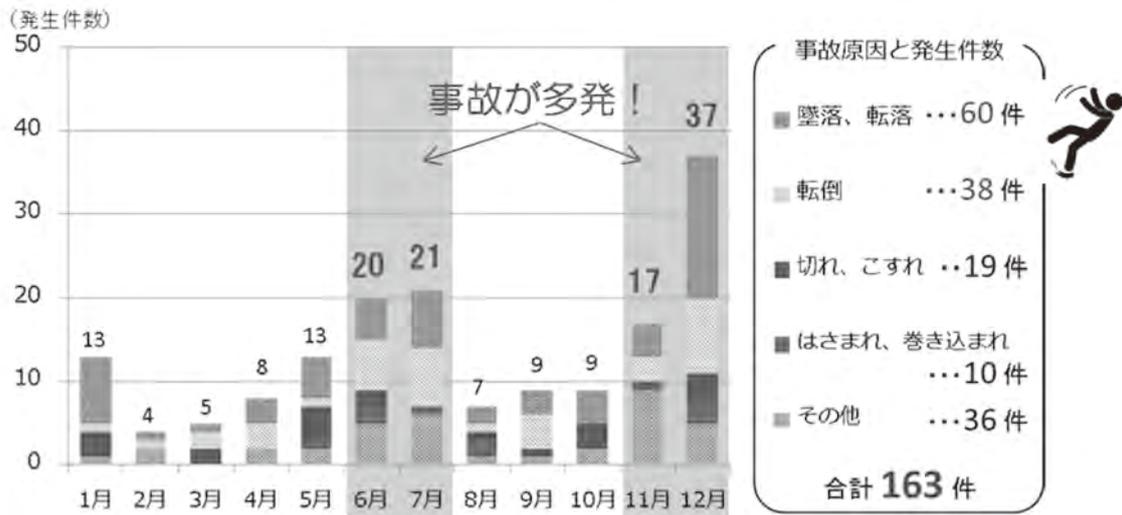
11月と12月は、農作業事故に注意!! 県・JAグループ和歌山・NOSAI和歌山

1. 農繁期は農作業事故が多発!!

11~12月の柿、みかん、6~7月のうめ、ももの収穫時期に多くの事故が発生しています。

2. 事故原因の大半は『墜落・転落』や『転倒』

傾斜地の果樹園が多い和歌山県では、樹木や脚立、傾斜地からの墜落や転落、作業中の転倒が多くなっています。



労災保険の休業補償対象事故の発生状況^{*} (平成23~25年の3カ年合計)

^{*}休業4日以上、和歌山労働局まとめ

3. 事故防止のポイント

ちょっとした「焦り」「気のゆるみ」「注意不足」が事故につながります。ゆとりある作業計画と事前準備を心がけましょう。

- 運搬通路の枝等の障害物を取り除いておく。
- 収穫時は、必ず手袋を着用する。
- 滑りやすい箇所や段差のある箇所では、足下に十分注意を払う。
- 脚立を使用する時は、足場を確認し、チェーンをかける。
- 草刈り機の草の絡まりを取り除く際は、必ずエンジンを停止させる。
- トラクターはバランスを崩しやすい乗り物であると認識し、段差を乗り越える時はできるだけゆっくりと進むなど細心の注意を払う。

4. 事故リスクに備えて、労災保険や共済への加入を

加入には要件があります。詳しくは下記へお問い合わせください。

労災保険：和歌山労働局総務部労働保険徴収室 TEL073-488-1102

農作業中傷害共済：最寄りのJA窓口

農機具損害共済：県内各農業共済組合

(参考) 農業士について

昭和51年から県知事が認定している制度。

地域農業の振興と農村の活性化にリーダー的役割を果たしている農業者に対し、付与される称号。「指導農業士(65歳まで)」「地域農業士(60歳まで)」「青年農業士(40歳まで)」の3つの区分がある。

平成26年10月現在の認定者数は以下の通り。

指導農業士	175名	(うち女性 23名)
地域農業士	584名	(うち女性 70名)
青年農業士	166名	(うち女性 1名)
合計	925名	(うち女性 94名)



表紙の人

かつらぎ町 指導農業士

水浦 言仁さん
(和歌山県農業士会連絡協議会 会計)

カキ・ブドウ生産者。
観光農業(ブドウ)にも早くから取り組み、
地域で先駆的な役割を果たす。

和歌山の農業士 第3号

発行日：26年11月

編集：和歌山県

農業士会連絡協議会

印刷：株式会社 おかだプリント



和歌山の 農業士

和歌山県
農業士会連絡協議会

